

元 菊 町 遺 跡

— 近世城下町金沢の発掘調査報告 —

1990

石川県立埋蔵文化財センター

元 菊 町 遺 跡

— 近世城下町金沢の発掘調査報告 —

1 9 9 0

石川県立埋蔵文化財センター

序 文

金沢は加賀藩の政治・経済・文化の中枢として繁栄した城下町であり、今も百万石城下の面影をとどめる町として、遠来の観光者が数多く訪れている。たしかに、戦災や大きな自然災害に遭わなかった市内には、武家屋敷の土塀や古い寺々が連なる一角に、往時のたたずまいを残し、美術館や博物館には、百万石の栄華を物語る品々が、見る人の目をひきつけ、その豪華さ、絢爛さにわれを忘れさせる。また、文献史学の方面でも、城下町の武士や町人の暮らしぶりが、詳細にわたって研究され、かつての金沢の姿を彷彿させてくれるのである。

しかし、考古学的観点からみたとき、城下町金沢の実態は、すこぶる不鮮明であり、把握されていることが乏しい。いうまでもなく、近世城下町としての金沢の全域が、人口四十四万を擁する現代都市金沢と重なっており、発掘調査に至るケースが著しく限られているからである。しかし、このことは現代都市の形成に当たって、近世城下町の全てが破壊され、消滅してしまったということの意味しない。むしろ、私たちの経験からいえば、現在の街並みの地下には、極めて良好な状態で、かつ広い範囲にわたって、古い城下町が深い眠りにについているのである。金沢城を中心に、壮大な武家屋敷はもとより、商家や庶民の暮らしをとどめる遺構・遺物が数多く残されているのである。

元菊町遺跡の発掘は、城下町の縁辺部ではあったが、まさに近世金沢の一角に遭遇した事例であった。伊万里系・唐津系・瀬戸美濃系などの陶磁器類、土師質や越前系などの生活雑器のほか、玩具（人形・面子）、装身具（簪・笄）、文具（硯・水滴）、嗜好具（煙管）など、近世後期の庶民生活をいきいきと示す多彩な遺物が、数百年の眠りから覚め、タイム・トンネルから今抜け出たように、私たちの前に現れたのである。出土品は、破損品であったり、色褪せていたりして、伝世の立派な品々に比べ見劣りがする。しかし、そこには、その道具を大切に使い通してきた庶民の生活が滲んでいたのである。

城下町金沢の歴史は、ガラス越しに見る工芸品や古文書・古絵図類から語られることが多い。そこに描かれる金沢は、藩主・上級武士・家柄町人などを中心とした華々しい表の暮らしである。いうまでもなく、これを明らかにすることも歴史的に重要なことである。

それに対して、発掘調査によって得られる資料の多くは、城・武家屋敷はもとより庶民の家々での実生活を示すものであり、古文書では現れない暮らしぶりを伝えるものである。とは言っても、例えば、各地産の陶磁器の出土頻度などから、生活用具の流通のありかたや、城下の経済の動向など社会的側面について究明することも可能である。むしろ、こうした方面にこそ、中・近世考古学の本来の使命が込められているものと思う。石川県における近世遺跡の発掘調査は、まだ緒についたばかりであり、幾多の困難な問題を秘めているが、今後の進展を願わずにおれない。なお、文末であるが、当遺跡の調査に協力された多くの方々に深く感謝の意を表します。

所 長 橋 本 澄 夫

例 言

- 1 本書は近世城下町金沢の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は金沢駅付近の連続立体交差化に伴う道路建設に先立ち、金沢駅鉄道高架事務所から依頼をうけて石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査地点は金沢市元菊町地内である。工事予定の関係で2ヶ年度にわたって調査し、試掘調査の結果から立会調査で済ませた部分もある。それぞれ1次調査、2次調査、立会調査とする。
- 3 調査期間は次の通りである。
 - 第1次調査 昭和62年10月5日～10月26日
 - 第2次調査 平成元年4月12日～5月9日
 - 立会調査 平成元年5月26日～5月31日
- 4 1・2次調査は伊藤雅文（石川県立埋蔵文化財センター 主事）が担当し、立会調査は平田天秋（石川県立埋蔵文化財センター 専門員）と伊藤が担当した。また、現地調査には芝田悟、宮下栄仁、田畑弘、井上俊平の補助をうけた。
- 5 出土遺物の大部分は(社)石川県埋蔵文化財保存協会に整理作業を依頼した。担当は河村裕子、馬場正子、小林直子、吉田節子である。
- 6 本書の執筆は調査参加者で分担し目次に記した。編集は伊藤がおこなった。
- 7 出土磁器のうち、特に注記していないものは伊万里系のものである。また、陶器のうち、産地がわかるもののみ文章中に記した。
- 8 発掘調査ならびに整理作業、本書の作成にあたり、以下の方々の援助、助言、教示を頂いた。深く感謝いたします。

平田天秋 田島明人 増山 仁 芝田 悟 藤田邦雄 垣内光次郎 本田秀生
安 英樹 大橋康二 野上建紀 白神典之 森 毅 佐久間貴士 長佐古信也
鈴木裕子 村田裕子 戸澗幹夫 宇佐美孝 中村繁和 大藪智子 南 秀雄

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	(伊藤雅文)
第1節 調査の契機	(伊藤)
第2節 調査日誌	(伊藤)
第2章 遺跡をめぐる環境	(安英樹)
第1節 位置	(安)
第2節 考古学的環境	(安)
第3章 調査結果	(伊藤)
第1節 第1次調査	(伊藤)
第2節 第2次調査	(伊藤)
第3節 立会調査	(平田天秋)
第4章 総括	(伊藤)

図 版 目 次

PL 1	Wトレンチ全景 / SX01周辺
PL 2	Pit 3 遺物出土状況 / Pit 3・4・6・7
PL 3	Wトレンチ壁面 / Eトレンチ全景
PL 4	調査区全景 / SK10周辺
PL 5	SK06・07周辺 / SK10全景
PL 6	SK10遺物出土状況(1) / 同(2)
PL 7	SK10全景 / SK06全景
PL 8	SK03・04・05・12 / 調査区壁面
PL 9	第1次調査出土遺物(1)
PL 10	第2次調査出土遺物(1)
PL 11	第2次調査出土遺物(2)
PL 12	第2次調査出土遺物(3)
PL 13	第1次調査出土遺物(2)
PL 14	第2次調査出土遺物(4)
PL 15	第2次調査出土遺物(5)
PL 16	元菊町遺跡出土遺物
PL 17	元菊町遺跡出土磁器銘款
PL 18	金沢町絵図
PL 19	金沢町絵図(部分)
PL 20	金沢町絵図(部分)

挿 図 目 次

Fig. 1	元菊町遺跡位置図	1
Fig. 2	調査区位置図	2
Fig. 3	第1次調査作業風景	3
Fig. 4	第2次調査作業風景	4
Fig. 5	元菊町遺跡の位置	5
Fig. 6	金沢市域の遺跡分布	6
Fig. 7	明治期の遺跡周辺地形図	8
Fig. 8	元菊町遺跡基本土層図	9
Fig. 9	第2次調査地山測量図	9
Fig. 10	Eトレンチ平面図	10
Fig. 11	Wトレンチ全体図	11
Fig. 12	土壇・ピット実測図	12
Fig. 13	第1次調査出土遺物（1）	13
Fig. 14	第1次調査出土遺物（2）	14
Fig. 15	第1次調査出土遺物（3）	15
Fig. 16	元菊町遺跡出土古銭	15
Fig. 17	第2次調査調査区全体図	折込
Fig. 18	土壇実測図	19
Fig. 19	S K 10実測図	21
Fig. 20	第2次調査各遺構出土遺物（1）	23
Fig. 21	第2次調査各遺構出土遺物（2）	24
Fig. 22	第2次調査各遺構出土遺物（3）	25
Fig. 23	第2次調査各遺構出土遺物（4）	26
Fig. 24	S K 10出土木器	27
Fig. 25	第2次調査整地土出土遺物（1）	30
Fig. 26	第2次調査整地土出土遺物（2）	31
Fig. 27	第2次調査整地土出土遺物（3）	32
Fig. 28	発掘調査区と立会調査区	34
Fig. 29	立会調査区出土遺物	34
Fig. 30	明治36年発行金沢明細図	45
Fig. 31	昭和53年発行地形図	45
Fig. 32	藪田町周辺の変遷	47
Fig. 33	「金沢町絵図」藪田町周辺(文化8年)	折込

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の契機

北陸本線の高架化は昭和29年に北陸本線複線電化促進協議会によって早くも提言され、昭和53年から県施工の都市計画事業として着手し現在に至っている。そして北陸新幹線誘致機運によって、より具体的実現されるようになった。調査の契機となった工事は鉄道高架工事に直接伴うものではなく、それに付随する工事である。金沢の中心部から金石に通じる「金石往還」が北陸本線にかかる中橋陸橋がある。それが高架事業に伴いつけかえすることになり、そのために迂回路が必要となった。この迂回路建設によるものである。迂回路とはいえ、将来的には橋場若宮線という都市計画道路になる部分である。

遺跡の確認調査を実施したのは鉄道高架橋梁部分と当該道路建設部分で、昭和62年4月22日、23日に実施した。高架部分は攪乱が著しく埋蔵文化財の確認ができなかったものの、道路建設部分で遺構らしい落込みと土器を確認した。

当埋蔵文化財センターとしては市街地の本格的な発掘はそれまで行われていなかった。しかし事業の大きさおよび埋蔵文化財の可能性を勘案して道路部分の試掘調査を昭和62年9月（担当は福島正実、伊藤雅文）に実施した結果、幕末頃と考えられる土師質小皿と溝のような落込みを確認し、その分布範囲を確定した。当センター内部での取り扱いでも発掘が必要であるか疑問も提

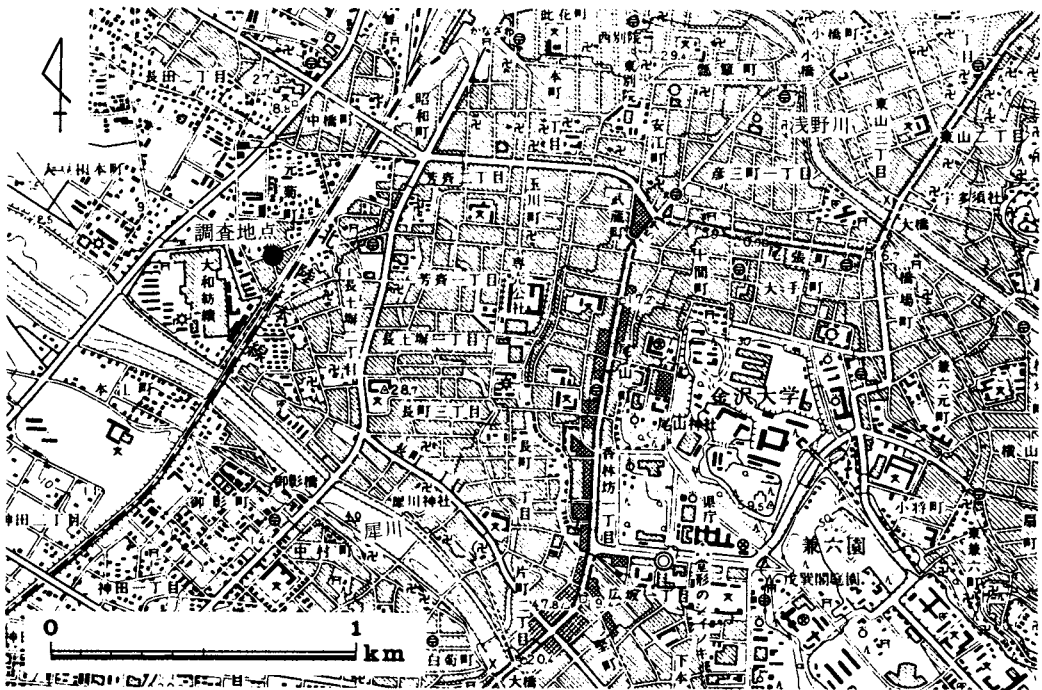


Fig. 1 元菊町遺跡位置図

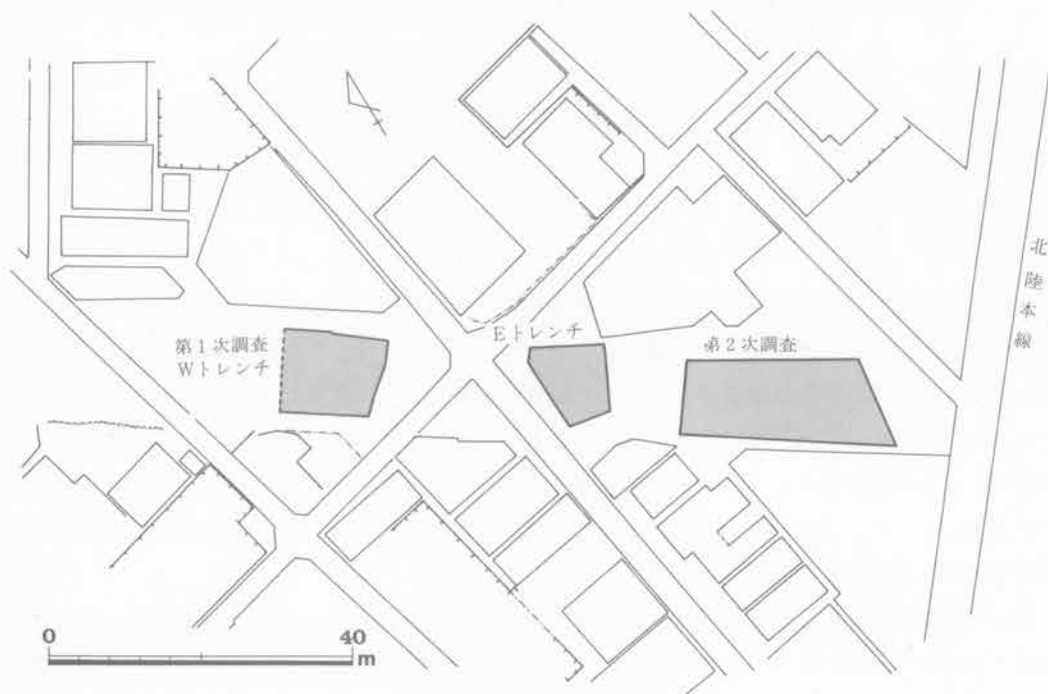


Fig. 2 調査区位置図

出されていたが、近世が現在考古学の対象となりうることを背景として本調査に踏み切った。これまで近世遺構・遺物を発掘する機会は幾らかあったものの複合遺跡の遺構としてであったが、近世遺構を主目的とする発掘はおそらくセンター始まって以来のものであろう。

なお、遺跡名は便宜的に現在の地名から「元菊町遺跡」とし、将来的に変更することにした。本来は「城下町の遺跡」と認識すべきだろう。しかし、その範囲が確定されないことや、石川の近世考古学をとりまく環境が十分に整備されていないことから、本報告において「元菊町遺跡」の名を用いた。

事業計画の関係で2ヶ年度にわたって発掘調査を実施した。1次調査は昭和62年度に実施した。市道部分は生活道路であることや埋設管の関係で発掘を見合せそれを中心にしてW、Eトレンチを設定した。それぞれ150㎡と80㎡である。また2次調査は平成元年度にEトレンチの延長部分の約400㎡の発掘を行った。ともに伊藤が調査を担当した。

また、伊藤と平田天秋が昭和63年3月17日におこなった鉄道を挟んだ東側の部分の試掘調査の結果、(株)日本通運の倉庫の基礎および整地作業のために遺構の広がりやを明確に確認できなかった。しかも現線路敷きの部分は遺構の存在が予想されながら発掘不可能な部分である。したがってこれらの範囲400㎡を立会調査とすることにし、伊藤と平田が担当した。

文末ながら調査に協力をおしなかつた金沢駅鉄道高架事務所に感謝します。そのために調査が円滑に進んだことを付記します。

第2節 調査日誌

第1次調査（昭和62年10月5日～10月26日）

10月5日（晴れ）

本日より発掘調査に入る。重機による掘削を開始する。

10月6日（曇後雨）

重機による掘削を完了する。

10月7日（晴れ）

器材を搬入する。人力掘削開始。

10月8日（晴れ）

Eトレンチの精査完了。ほとんどが攪乱によって旧状を留めていなかった。Wトレンチの掘削を開始。

10月9日（晴れ）

Eトレンチの1/50の略図を作成する。Wトレンチの杭をうち、精査する。

10月12日（曇一時雨）

Wトレンチ遺構検出。

10月13日（晴れ）

S D01およびS X01の掘削。

10月14日（晴れ）

遺構掘削。

10月15日（晴れ時々曇）

遺構掘削。

10月16日（曇時々雨）

E・Wトレンチの全体写真。

10月20日（曇時々雨）

Wトレンチの平面実測。

10月21日（曇時々雨）

平板測量。ベース面のたちわり。

10月22日（晴れ時々曇）

平板測量。

10月26日（曇）

器材を撤収し現地調査を完了する。

第2次調査（平成元年4月12日～5月31日）

4月12日（晴れ）

仮設住居の建設。鉄道高架事務所と現場で最終の打ち合せを行う。

4月13日（晴れ）

重機による掘削。1次調査時のポイントを確認するも、ほとんどが失われていた。

4月17日（曇時々晴れ）

人力掘削開始。器材の搬入。杭の設定。

4月18日（晴れ）

遺構面の精査。

4月19日（晴れ）

遺構面および土層状況の精査。現遺構面は整地土（幕末～明治頃）とわかる。



Fig. 3 第1次調査作業風景

4月20日（晴れ）
前日確認した整地土の除去。

4月21日（晴れ）
整地土の除去が終り、遺構面の精査。

4月25日（晴れ）
遺構面精査。

4月26日（晴れ）
遺構面精査、遺構掘削。

4月27日（晴れ）
遺構掘削。遺構セクション実測。

4月28日（晴れ）
遺構掘削、精査。SK01、07、08写真。

5月1日（曇時々雨）
SK10の掘削、写真。調査区の土層図。

5月2日（晴れ）
SK10掘削完了。全体写真。

5月8日（晴れ）
平板測量。

5月9日（晴れ）
地山測量。本日で発掘の現地調査を終了する。

立会調査（平成元年5月26日～5月31日）

5月26日（雨後晴れ）
立会調査を実施する。陶磁器片採集。

5月29日（晴れ）
立会調査の継続。

5月30日（晴れ）
土層堆積断面等の写真撮影。

5月31日（晴れ）
本日で立会調査を完了する。



Fig. 4 第2次調査作業風景

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 位 置

元菊町遺跡は旧加賀藩金沢城を中心に広がる城下町遺跡の一部であり、犀川・浅野川という2大水系のおりなす複雑な舌状台地（小立野台地）から沖積平野にかけて立地する。城下町の範囲は石川県金沢市の市街地全域にわたって存在するものと推定できる。

今回の発掘地点(1)が所在する元菊町は犀川扇状地が沖積平野へと移っていく部分であり、標高は約11mを測る。付近一帯は明治時代頃までは養蚕が盛んな田園地帯であったが、北陸線の整備とともに金沢駅前とその周辺を結ぶ交通の要地として開発が進み、昔の面影は失われつつある。

現在も金沢市による大規模な土地区画整理事業（駅西開発）が進み、また今回の発掘調査の原因ともなった北陸本線の高架化など、新たな開発計画も進行中である。

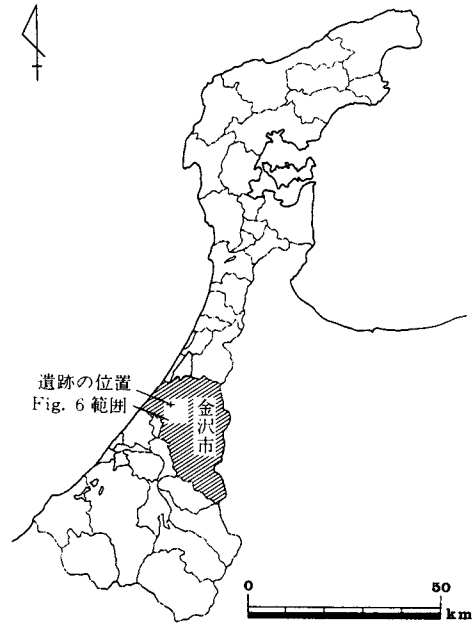


Fig. 5 元菊町遺跡の位置

第2節 考古学的環境

現金沢市街地は犀川・浅野川の氾濫原であり、扇状地の各所に河岸段丘を形成している。湧水も比較的豊富であり、人々の進出が低湿な沖積平野よりも、舌状台地上や段丘上に始まったことは容易に想像できる。狩猟採集が生活の基盤であった縄文時代には台地上の河岸段丘に兼六公園遺跡(46)・堅町遺跡(48)・笠舞A遺跡(41)、やや下流の段丘面に犀川鉄橋遺跡(2)などの集落が営まれたが、全容の判明しているものは少ない。

稲作農耕が導入される弥生時代から古墳時代にかけては北安江遺跡(3)・玉鉾遺跡(6)・西念ネジタ遺跡(8)・藤江B遺跡(11)など、平野部への進出が盛んになる。ただし、長期定住に至ったものは少ないだろう。

また、当地が古文獻に登場するのは古墳時代であり、「国造本紀」によれば北加賀地方は加賀国造道君が統治していたとされる。しかし、古墳時代遺跡の分布密度は古墳・横穴・集落ともに希薄であり、御所八塚山古墳群(61)・東長江横穴群(58)などがあるが、中心はこれよりさらに北の地域で、現在の小坂・森本地区あたりと推定されている。弥生・古墳時代には市域の土地利用は本格化していないと言えよう。

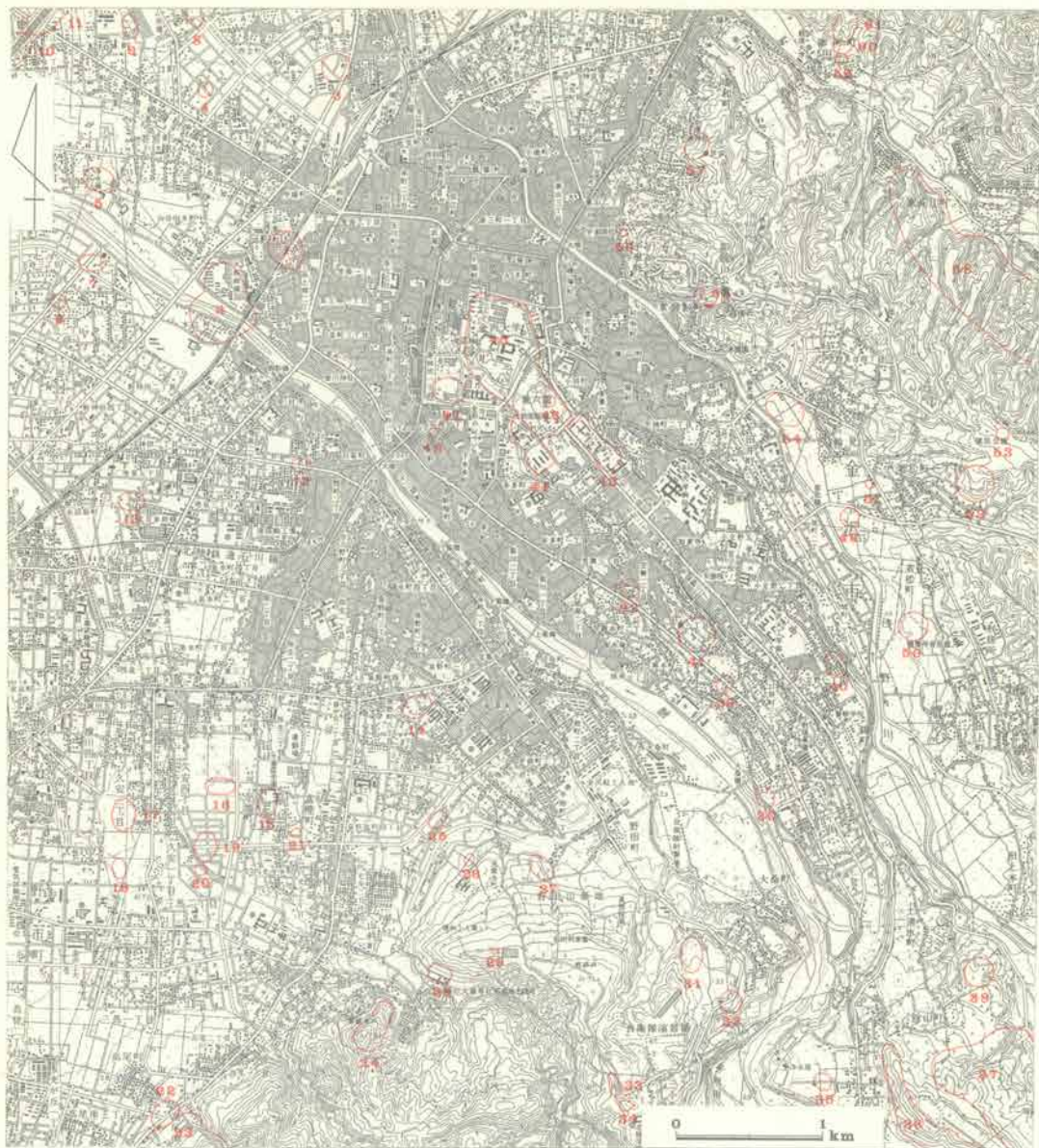


Fig. 6 金沢市域の遺跡分布

1. 元菊町遺跡 (今回の発掘地点・近世) 2. 犀川鉄橋遺跡 (縄文・古墳) 3. 北安江遺跡 (弥生～近世) 4. 二口町遺跡 (弥生) 5. 若宮遺跡 (中世) 6. 玉鉾遺跡 (古墳) 7. 玉鉾B遺跡 (古代) 8. 西念ネジタ遺跡 (弥生) 9. ニロクチョウA遺跡 (古墳) 10. 藤江A遺跡 (古代) 11. 藤江B遺跡 (弥生) 12. 増泉遺跡 (古代) 13. 増泉排水路遺跡 (古墳) 14. 泉野遺跡 (縄文) 15. 有松A遺跡 (縄文) 16. 有松C遺跡 (縄文～古墳) 17. 久安さんまい遺跡 (古代) 18. 久安トノヤシキ遺跡 (古墳) 19. 円光寺向田B・C遺跡 (古墳・古代) 20. 寺地向田遺跡 (古代) 21. 寺地A遺跡 (縄文) 22. 高尾遺跡 (古代) 23. 高尾城跡 (中世) 24. 満願寺山古墳群・塔跡 (古墳・中世) 25. 長坂狐塚古墳 (古墳) 26. 長坂二子塚古墳 (古墳) 27. 長坂遺跡 (古墳) 28. 山科かねつき堂遺跡 (縄文・古代・中世) 29. 山科うわの塚古墳 (古墳) 30. 大桑橋遺跡 (古墳) 31. 大桑町中平遺跡 (縄文) 32. つつじが丘遺跡 (縄文) 33. 三子牛ハバ遺跡 (古代) 34. 三子牛さこ山遺跡 (古代) 35. 末遺跡 (縄文) 36. 末窯跡末支群 (古代) 37. 末窯跡浅川支群 (古代) 38. 館山遺跡 (縄文) 39. 三口新町遺跡 (古代) 40. 旧上野射撃場遺跡 (縄文) 41. 笠舞A遺跡 (縄文) 42. 笠舞B遺跡 (縄文) 43. 横山屋敷跡遺跡 (近世) 44. 本多屋敷跡遺跡 (近世) 45. 金沢城跡 (近世) 46. 兼六公園遺跡 (縄文) 47. 広坂遺跡 (古代) 48. 堅町遺跡 (縄文) 49. 田上遺跡 (古墳) 50. 若松遺跡 (古代) 51. 若松八幡社遺跡 (中世) 52. 若松本泉寺跡 (中世) 53. 若松大池遺跡 (縄文) 54. 鈴見遺跡 (古代) 55. 卯辰山窯跡 (古代) 56. 春日山遺跡 (縄文) 57. 山の上横穴群 (古墳) 58. 東長江横穴群 (古墳) 59. 御所遺跡 (縄文・古墳) 60. 御所二条館跡 (中世) 61. 御所ハツ塚山古墳群 (古墳)

Fig. 6 金沢市域の遺跡分布

古代の金沢は、まず823年（弘仁14年）に加賀国加賀郡（のちの河北郡）に含まれる。しかし、加賀郡が浅野川を境として南北に分裂すると今度はその大部分は石川郡に吸収された。現市街地はどちらの郡に属したときもおそらくは郡家から離れた位置にあったことになろう。一方、個々の地名では古文献に加賀郡8郷のうちの三馬郷・富樫郷・玉戈郷・大桑郷・田上郷・大野郷や、交通施設としての田上駅の名が確認されるにとどまる。考古資料では、藤江A遺跡(10)・玉鉾B遺跡(7)・久安さんまい遺跡(17)などがあるが荘園・郷・寺院などの古代の金沢の様相を具体的に示す資料は少ない。これらのことから古代の金沢では未だ大規模な開発が進むには至らず、短期間の土地経営方式が存続していると考えられる。

中世に入ると、まず任用国司であった斎藤氏が領主化し、石川郡に君臨する。鎌倉末期から室町時代には、斎藤氏から出た富樫氏が正式に加賀国守護となり、高尾城（現在の高尾町南部）を本拠としたようである。経済面では陸上・海上ともに白山宮が大きな勢力を持っていたらしい。室町末期からは真宗本願寺の勢力が思想面ばかりではなく、政治的・経済的にも強まり、在来の支配勢力である守護との度々の衝突は一向一揆へと発展していった。その結果、1488年（長享2年）に守護富樫氏が滅亡し、一向衆による非武士政権が一世にわたったのは日本史上にもまれな事実である。考古資料も文献と合致するものが多く、前述の高尾城跡(23)や一向一揆の本拠の一つであった若松本泉寺跡(52)などがあるが、一般的な集落遺跡は多くない。富樫氏滅亡後、一向衆が山崎丘陵（現在の金沢城～兼六園付近）に金沢坊（尾山御坊・正確な地点は不明）を建設し、本拠としたことにより、加賀の中心ははじめて金沢に移ることになる。中世における開発という面でもっとも注目すべきはこの点であり、この時期金沢町は尾山御坊を中心として郡・組・座を集結し、一大寺内町を形成するのである。

近世の金沢は、まず一向一揆時代の寺内町から加賀藩の「金沢町」城下町への転換が行われる。金沢町は金沢城を中心として犀川・浅野川という天然の濠と両河を連結した人工の濠に守られた四稜形をなし、城外には侍屋敷や町人居住区を明確に区画し、辰巳用水が城内外に給水を行う。寺院は周辺の卯辰寺町・野田寺町などの一定区域に配置した。街道は金沢城から近郊へ放射状にのびる。これらは、百万石という最大石高藩の城下町にふさわしいものであった。城下町金沢を中心として加賀藩は加賀・能登・越中を領有し、1639年（寛永16年）に富山藩・大聖寺藩を分出させたが、藩主14代290年近くにわたり繁栄した。

明治維新後の金沢は、地元産業が育ちにくい加賀藩時代からの消費都市構造が災いし、金沢市制が成立して後もしばらく低迷する。金沢がふたたび脚光をあびるのは全国的な殖産興業政策が効果をあらわす明治末期以降となる。

現在、城下町金沢をしのばせるものは、我々の目に映るものでは金沢城跡(45)・兼六園・成巽閣などのわずかな重要文化財しかない。埋蔵文化財としては今回の発掘地点(1)のほかに、横山屋敷跡遺跡(43)・本多屋敷跡遺跡(44)などが確認されており、著名な重要文化財とともに、遺跡の一角になるものと捉えている。

以上、まとめると現金沢市街地には遅くとも縄文時代から人々が居住し続けたが、本格的な開発は中世末から始まったということになる。ところが遺跡地図を一見すると金沢市域の遺跡の分

布密度は中近世に限らず低いように感じる。これは現在の金沢市街地が多くの建築物や縦横に巡る道路に覆われて、ほとんど踏査不可能な状況が生んだものであろう。今回の例のように、まだまだ未知の遺跡が地下に広がっているものと考えたい。

参考文献

浅香年木・田川捷一他『角川日本地名大辞典』17 石川県 角川書店 1981年

石川県教育委員会『石川県遺跡地図』 1980年（1986年一部改定）

北国出版社『石川県大百科辞典』 1975年

藤則雄「3. 河岸段丘」『金沢周辺の第四系と遺跡』北陸第四紀研究グループ 1975年

谷内尾晋司「第2章 遺跡の環境」『北安江遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1985年

米沢義光「第I章 遺跡の位置と環境」『金沢市犀川鉄橋遺跡第1・2次発掘調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター 1982年

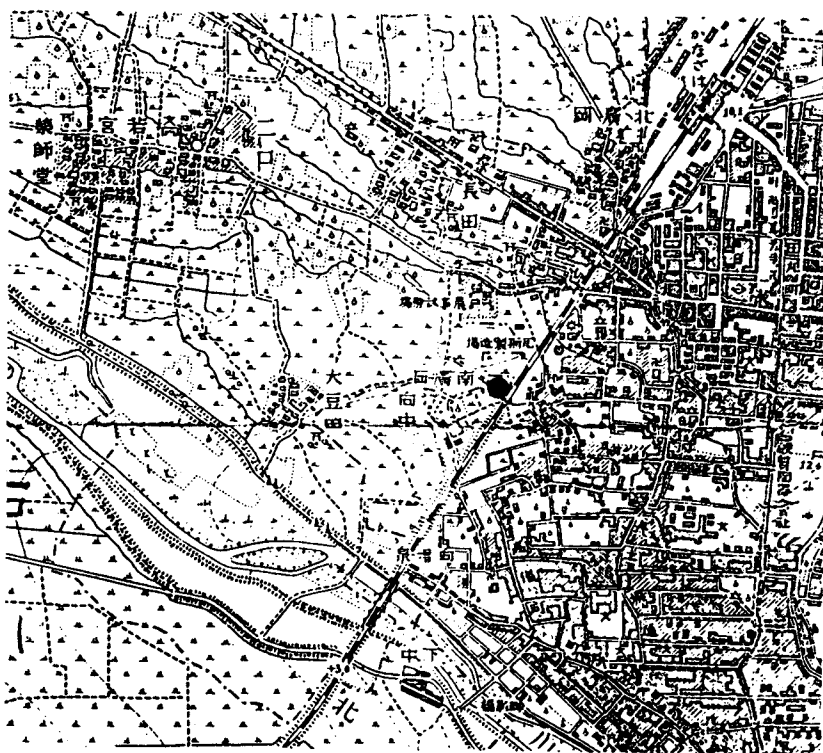


Fig. 7 明治期の遺跡周辺地形図

この地図は明治42年に大日本帝国陸地測量部が製作したものである。現在とくらべると、鉄道・道路などの基本的な構成は大きく変わっていないが、まだ民家は少なく、周辺には桑畑が広がっていたことがわかる。

第3章 調査結果

第1節 基本土層と地山

第1・2次調査のトレンチが近接しているためにはほぼ同じ土層の堆積状況を示している。すなわち、上より近現代の盛土・攪乱層、18～19世紀の整地土、地山である。最上層の盛土は家屋や工場の廃材を主としている。

整地土は厚い所で約20cm、薄い所で2～3cmを測る。黒灰色粘質土あるいは黒褐色粘質土を中心とし、3～10cm弱の小礫を部分的に多く含んでいる。概して汚れている土である。整地土中に面の存在を確認し難いものの、WトレンチでSX01を切るようにSD01等があるので途中に生活面の存在が予想される。しかしその厚みは薄いものである（註）。したがって、浅い落込みなどは地山まで面を下げた場合なくなることもある。

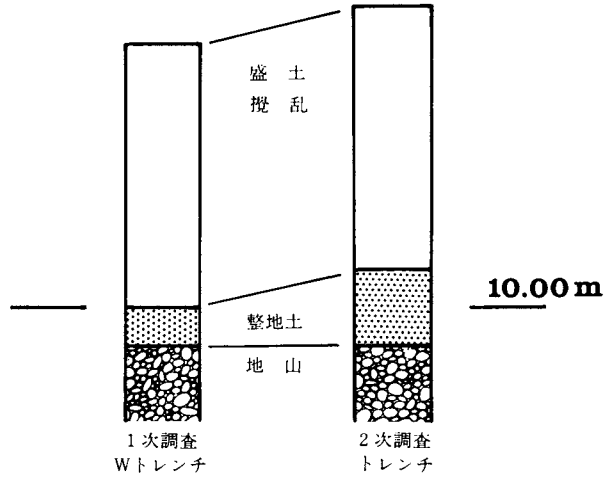


Fig. 8 元菊町遺跡基本土層図
(上下のスケールは1/20)

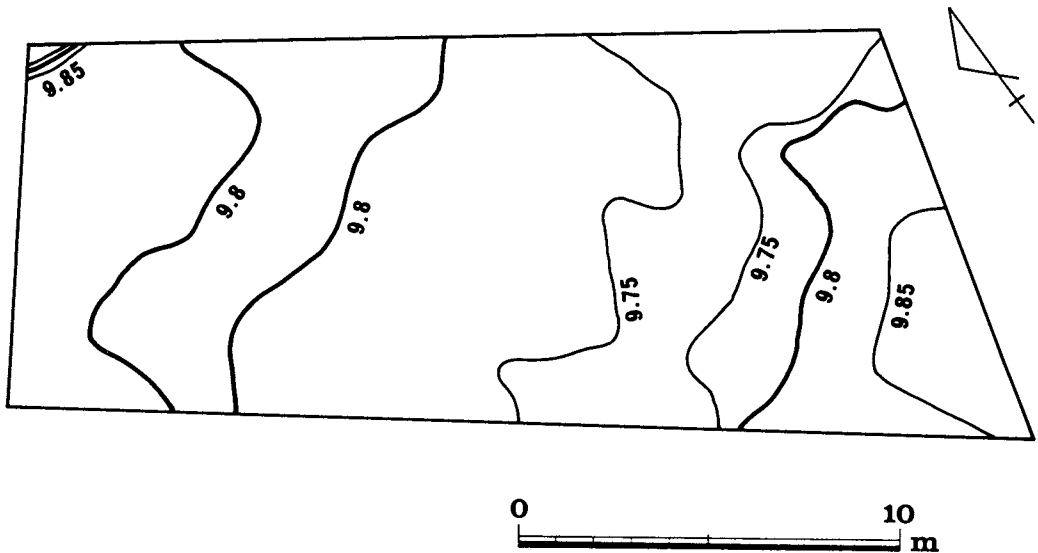


Fig. 9 地山測量図

地山は基本的に礫層で、本調査地が犀川扇状地の一面であることを示している。また、部分的に砂層であったり黄色粘質土であったりしている。地山面は必ずしもフラットではなく、第2次調査トレンチでは調査区中央が南北方向にやや落ち窪んだようになっている。

もう少し詳述すると、第2次調査トレンチ中央に南西から北東にかけて10cm近くの溝状の落ちがある。遺構と思われる施設等はなんら検出できなかったので、自然のものと判断できる。しかも地山面に予想以上の凹凸があることを指摘できる。また上の堆積土である整地土は礫を主体としているものの、標高9.8mと9.75mの等高線に挟まれた斜面(2ヶ所ある内の北側)では粘質土を中心とし礫の混入が非常に少ない。あたかも溝の上面あるいは道を検出したような状態であった。しかし、土層断面観察によっても明確な遺構の輪郭はみられず整地作業の違いと判断した。

註

佐久間貴士氏(大阪府教育委員会)によると、遺構面が良好に遺存している場合各遺構面はかなり複雑にいくんでおり、それを一面一面調査するのは不可能に近いものがあるという。本調査区においてもそのように複雑で薄い遺構面の集合体が整地土という形になってあらわれているようである。

第2節 第1次調査

a Eトレンチの遺構と遺物

市道を境にした東側のトレンチで約50㎡を測る。調査区全面にわたって攪乱がみられ、ほとん

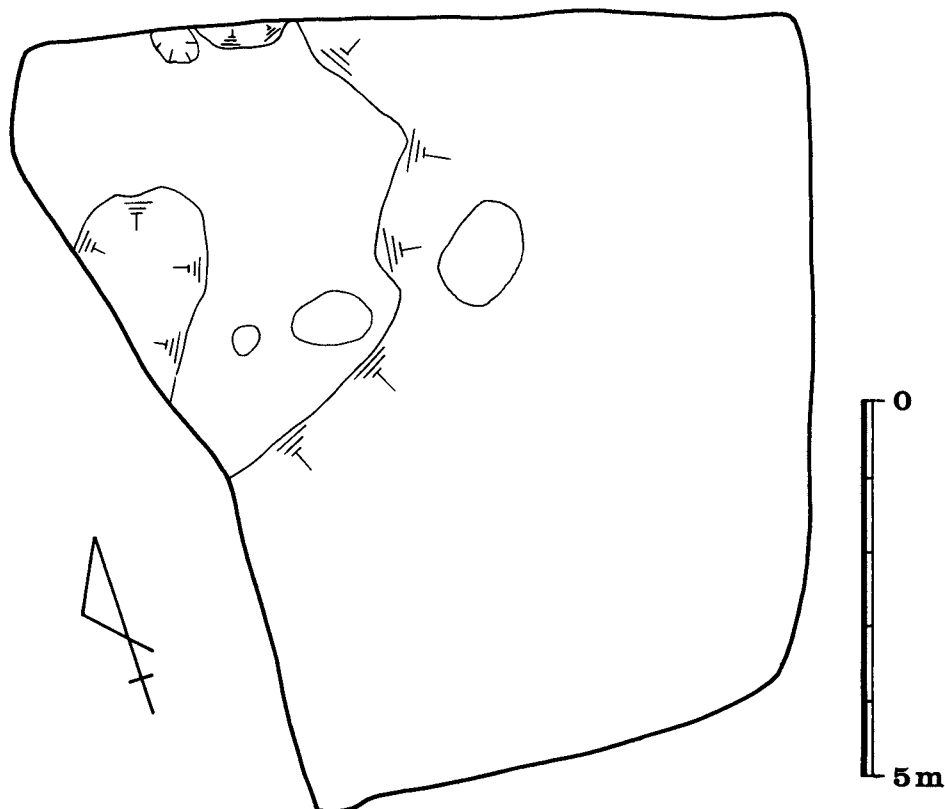


Fig. 10 Eトレンチ平面図

ど何も検出できなかった。したがって整地土も部分的にしか見られない。

SK01は浅い皿状を呈する長径1m近くの土壇である。埋土は整地土と同じで自然の落込みと考えられる。遺物は重機掘削時に収集したものがほとんどで、古そうな遺物を選び出したものである。したがって、Eトレンチ出土遺物の中には新しいものを含んでいる危険性があることを付言しておく。なお遺物はc項でWトレンチと一緒に記述する。

b Wトレンチの遺構と遺物

市道を境にした西側のトレンチで約200㎡を測る。

SD01

調査区南東隅から北西方に続く幅50~80cm、深さ5~10cmを測る浅い溝である。埋土は黒褐色粘質土で、基本的に整地土と同様部分的に小礫を含んでいる。溝底はほぼ平坦で東から4mの地点で一段深くなっているものの、南西隅に至って消失している。溝の形状はやや不定形である。また、SX01を切っている。第4章で再述するが、金沢町絵図に見える溝に比定できる可能性もある。

遺物の出土はあまり見られず陶磁器の細片が多い。Fig. 15-11（以下15-11のように略する）は中心に炉芯立を持つタイプで素焼製品である。口径4.4cm、器高2.2cmを測る。油煙の付着はほとんど見られずあまり使われなかったものと考えられる。このタイプの灯明具は幕末を中心とする時期に流行するので、少なくともこの溝も19世紀中頃を中心とする時期まで存在したことがわかる。

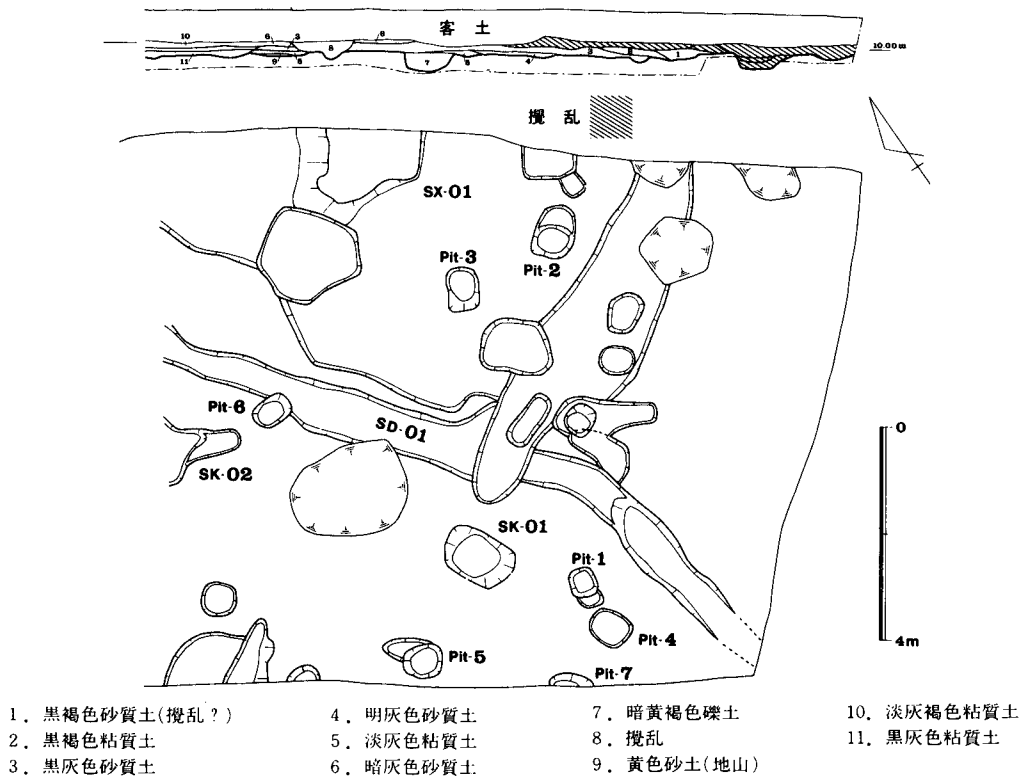


Fig. 11 Wトレンチ全体図

土 塚

SK01はいびつな矩形を呈する。長さ1.4m、幅90cm、深さ20cmを測り皿状に落ち込む。埋土は整地土と同一の黒褐色粘質土である。遺物の出土は皆無である。SK02等の他の土壌もほぼ同じ様相を呈している。ほとんどが無遺物であるが、概ねSD01と同時期と考えられる。なお、調査終了直前に壁面に沿って側溝を設定したところ土壌を確認した。埋土は地山と同じような礫層である。

ピット

ピット2はSX01内にあり、長さ1m、幅76cm、深さ13cmを測る。多少いびつな方形を呈し北側では2段になっている。整地土と同じ黒灰色砂質土を埋土としている。ピット4も浅い皿状を呈し整地土を埋土としている。ともに自然の窪みと考えられる。

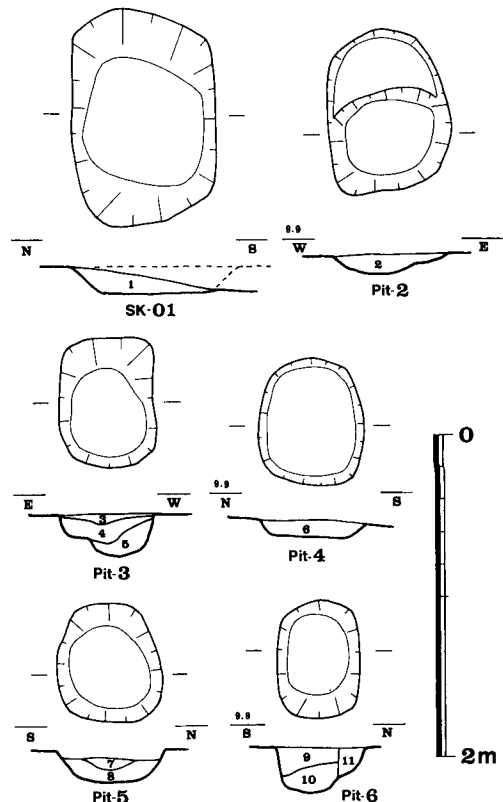
ピット3もSX01内にある。長さ80cm、幅60cm、深さ26cmを測る。上面には整地土が入り込み、下には淡黄色砂質土、暗灰色砂質土と続きほぼ水平に堆積している。第2層に地山ブロックを含むことから途中から人為的に埋められたと考えられる。ピット5も上面に整地土があり、途中に地山ブロックを含む層がある。つまり、整地作業時にこれらのピットが捨てられ(埋められ)たと考えられる。

ピット6はSD01に切られている。長さ73cm、幅50cm、深さ27cmを測る。柱根状に縦にはしる層の違いが見られる。地山ブロックを含む灰褐色砂質土が一方にあり、他方は整地土に近い質の埋土である。

ピット10以外はやや不定形でしかも10cm前後の深さしかなく、埋土も整地土と同じなので、ピット3と同じ自然の落込みの可能性が高い。なお、ピットの年代を直接示す資料の出土はない。

SX01

調査区の北半にある半円状の浅い窪みで深さ10cm程度である。底はかなりの凹凸が見られ、それにピット2・11・12等のように遺構番号をつけてしまったものもある。東端に溝状に更に1段低くなっている。整地土を埋土としているので、土層は単一で



- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1. 黒褐色砂質土 | 7. 灰褐色砂質土(地山ブロック含む) |
| 2. 黒灰色砂質土 | 8. 黒灰色砂質土 |
| 3. 黒灰色砂質土 | 9. 暗灰色砂質土 |
| 4. 淡黄色砂質土(地山ブロック含む) | 10. 黒灰色粘質土 |
| 5. 暗灰褐色砂質土 | 11. 灰褐色砂質土(地山ブロック多し) |
| 6. 黒灰褐色砂質土 | |

Fig. 12 土塚・ピット実測図

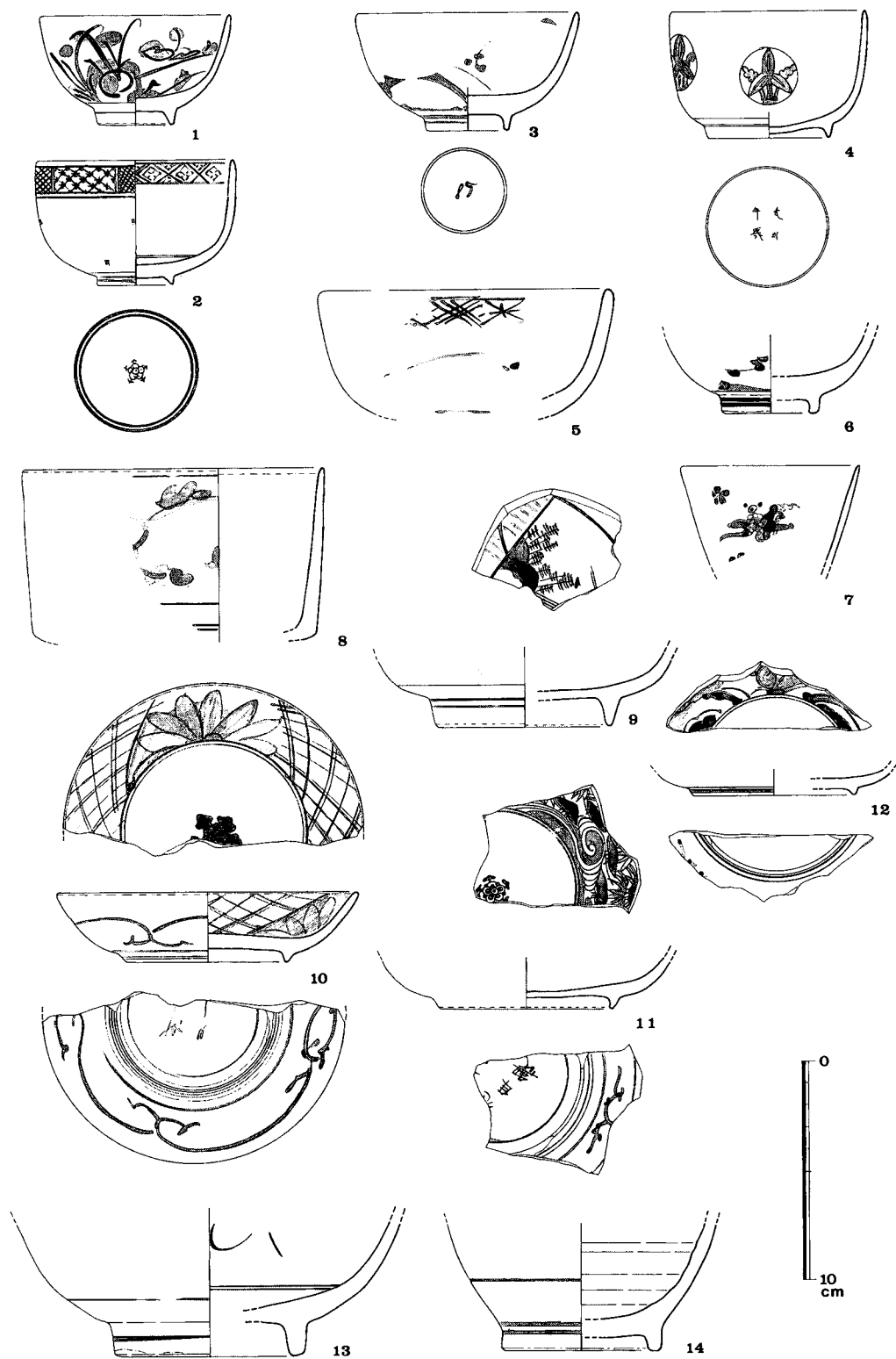


Fig. 13 第1次調査出土遺物(1)

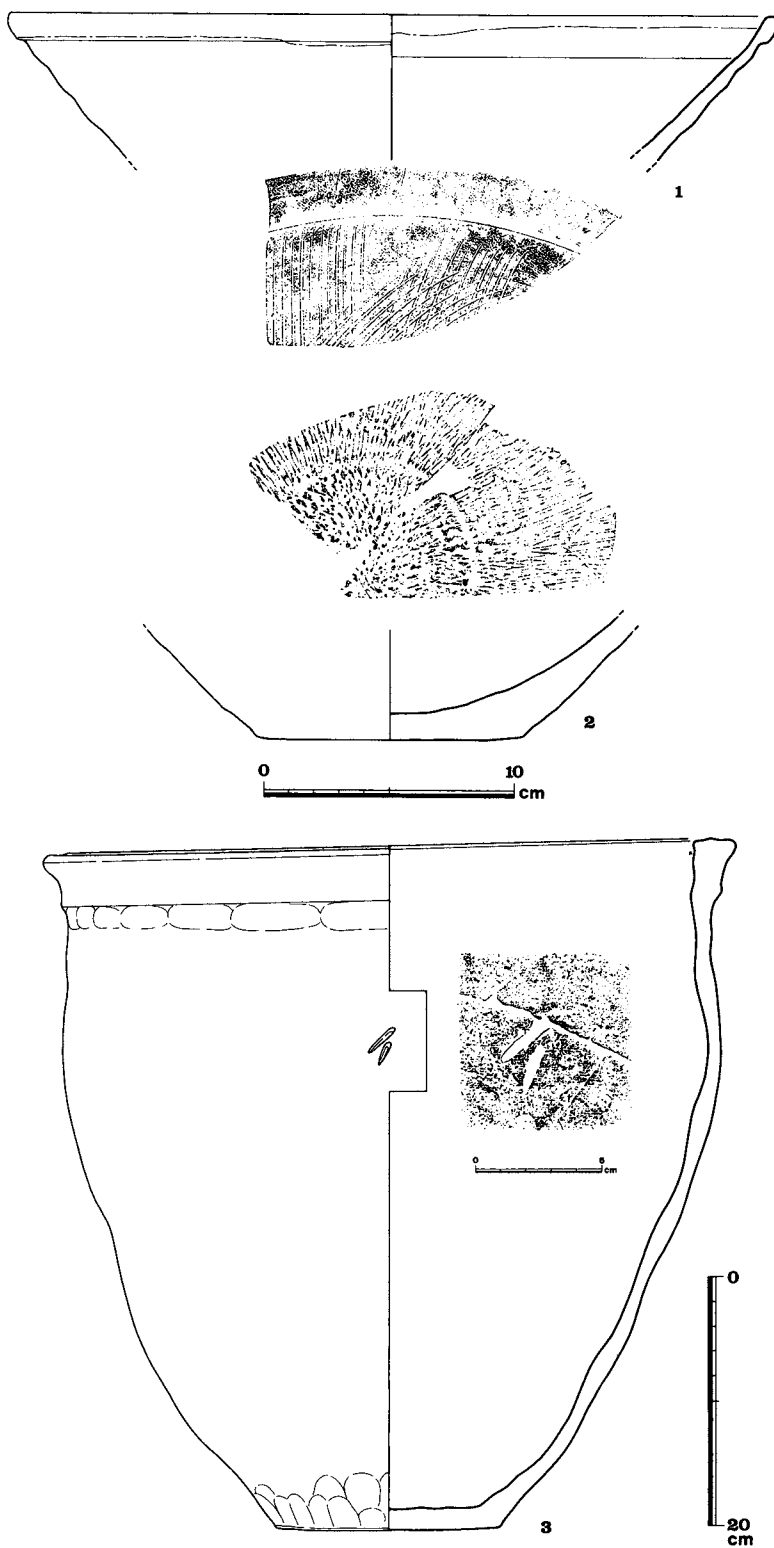


Fig. 14 第1次調査出土遺物(2)

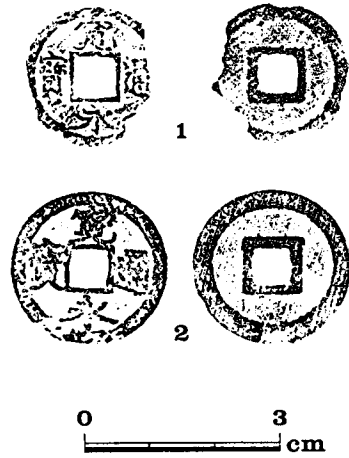
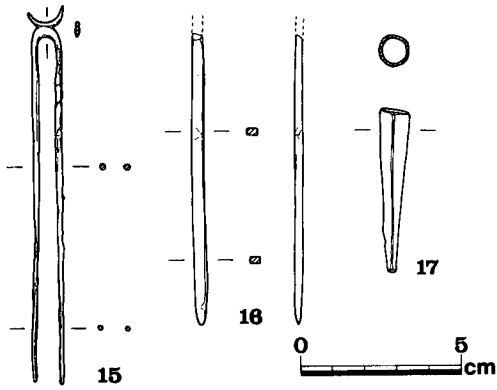
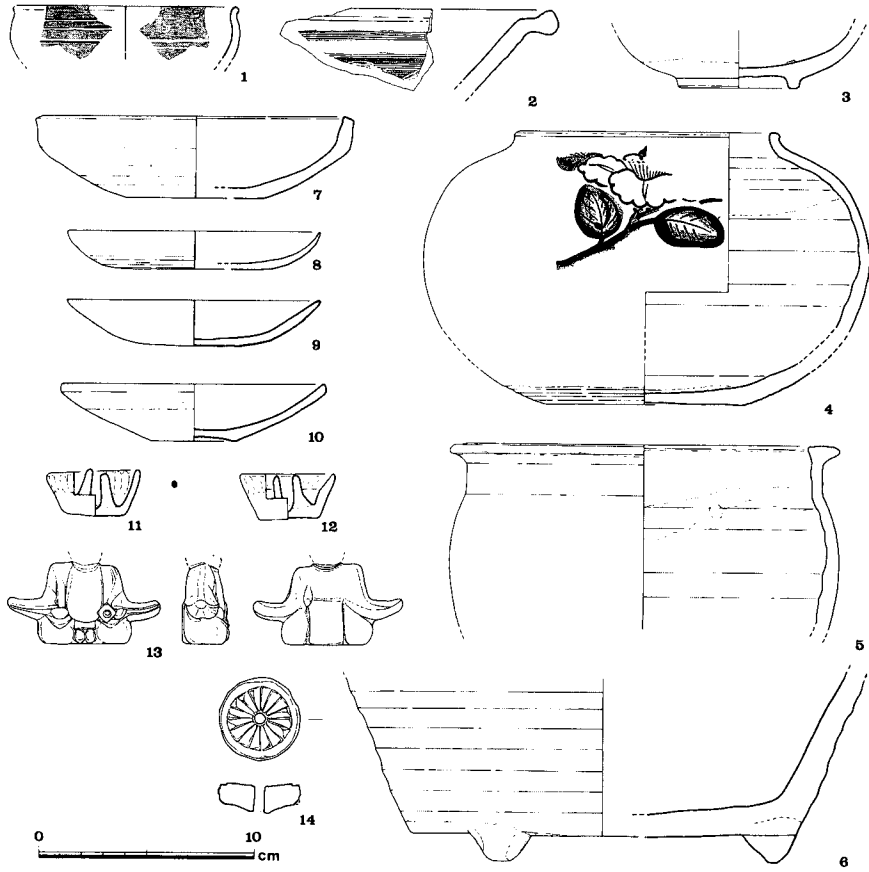


Fig. 15 第1次調査出土遺物(3)

Fig. 16 元菊町遺跡出土古銭

はなく部分的に礫が多かったり、粘性が高かったりしている。しかし概ね黒灰色系の粘性の強い砂質土である。

S X01から多くの遺物が出土した。陶磁器、土器および土製品・金属製品である

染付磁器

伊万里系である。13-3は碗で、いわゆるくらわんか手である。口径10cm、器高5.4cmを測り、外面に草花が描かれている。釉に透明感は少なく灰色に近い発色である。高台内面に福の銘がある。7はそばちょこである。釉の発色は良いが、素地はくすんだ感じである。10は皿である。口径13.5cm、高台径7.0cm、器高3.2cmを測り、口径に占める高台の割合が1/1.9ほどである。見込にはいわゆるコンニャク判による五弁花、側内面には花、外面には唐草が描かれている。高台内面に崩れた字体の「大明年製」銘がある。

陶器

15-1、2は肥前系のいわゆる刷毛目唐津である。ともに白泥で装飾している。

土器・土製品

14-2は播り鉢である。底面に回転糸切り痕が見られる。15-8、9は土師質小皿の形態の灯明皿である。ともに口径は11.8cmだが、8の底部はヘラケズリによってのに対し、9はすべてナデ仕上げである。そのためか、8の方が若干丸みを帯びた体部である。12はひょうそくで灯芯立を持つタイプである。手捏ね成形で灯芯立をはりつけている。いずれも素焼製品で、顕著な油煙の付着は見られない。14は面子状土製品と思われるが、中央に孔があいている。径3.8cmを測る。表面には花卉がスタンプされている。

金属製品等

15は銅製簪（かんざし）である。長さ11.8cm、厚さ1.5mmを測る。明確な破断面はないものの頭部は三ヶ月状を呈しているが、左右非対称であることから元来円形であったかもしれない。脚の断面形は円である。16はべっこう製筭（こうがい）である。現状で長さ9.1cm、幅4mm、厚さ2.5mmを測り、偏平な棒状を呈する。17は銅製煙管の吸口で円錐形を呈する。内部に木質の痕跡は見られない。

c 整地土出土遺物

染付磁器

図示した磁器は全て伊万里系のものである。

13-1～6は碗である。1は小振りのくらわんか手の碗でデザイン的な草が描かれている。くすんだ淡い藍色の呉須である。2は小さな三角形を呈する高台を持つ丸碗で、見込みに手描きによる稚拙な五弁花、口縁部内面に菱文、外面に格子文と市松文が交互に配され、中間に小さな格子が描かれている。やや濃い藍色の呉須で、灰色気味の釉である。4は印判による円内に描かれた桐文があり、高台内面に「大明年製」と崩された書体で記されている。5と6の素地は灰色でそのためかねずみ色の釉に見える。呉須も藍色というより青みの灰色である。5は口縁外面に格子のような文様を描いている。6は草木を描いている。ともに厚手の作りである。

8は筒碗である。素地は灰色がかり黒い微粒子を含んでいる。そのためにやや灰色がかった釉

の色である。口縁端部の釉は掻き取っている。9は身の浅い鉢と考えられる。径に対して高い高台となっている。内面に樹木、山が絵画的に描かれている。素地は8と同じである。11、12は皿である。11は見込に手描きによる五弁花、周囲に笹が描かれ、外面は唐草である。唐草は輪郭を描きその間を塗りつぶしている。底に「大明成化年製」銘がある。呉須の発色はよく釉の透明感もある。12は何を描いているかわからない。呉須の発色も良い。蛇の目凹形高台である。13は鉢である。5、6同様素地は灰色を呈し、呉須、釉も同じである。14は瓶の底部と思われる。内面に釉はなく外面のみ施されている。呉須は淡いコバルト色である。

陶器

14-1は挿り鉢である。口径30.4cmを測り、玉縁状の口縁である。口縁端部にのみ黒い釉が薄くかけられている。肥前系と思われる。2は大甕である。口径54.9cm、器高58cmを測り深い鉢形態である。口縁部は帯状の突帯がめぐり体部上半にヘラ記号が刻まれている。内面に著しい付着物があり、人間の排泄物と思われる。越前焼と思われる。

15-3は京焼系碗である。ケズリによって成形し灰緑色の釉がかけられ、見込に目跡が残っている。細かい貫入が入っている。4は壺か土瓶のようなものかと考えられるが、破片数が少なくわからない。底部に煤など被熱の痕跡はない。灰色気味の黄釉が底部以外に薄く施され、細かい貫入が入っている。外面に鉄釉で椿(?)を描いている。内面は体部下半のみ釉を施している。なお、漆継の痕跡がある。5は肥前系の甕である。外面と頸部内面に灰色がかったうぐいす色の釉があるが、これは焼成不良によって釉が完全に化学変化しなかったと思われる。本来は茶褐色と思われる。

土器・土製品

15-6は鉢で3~4ヶ所に脚がつくものと思われる。内外面に薄く褐色の釉が塗られている。硬質で、火鉢と思われる。7は土師質の皿で口径14.8cm、器高3.9cmを測り、底部はケズリによって仕上げられている。口縁部はやや外反しつつ真っ直ぐ伸び、端部は厚い。煤は口縁端部から外面にかけて若干付着している。皿ではなく蓋の可能性もある。10は灯明具で口径12.4cm、器高2.7cmを測り、内面から外面口縁下まで施釉されている。素地は陶器質で、釉は灰色を呈する。なお、底部にタール状のものが付着している。13は土製人形で頭部を欠損している。天神人形と思われ、右手には笏(しゃく)を差し込む穴と、底部に径4mmの人形を立たせるための穴があげられている。

古銭

16-1は1次調査、2は2次調査出土の寛永通宝である。1の面径2.15cm、輪の厚さ1.20mm、現存の重さ1.4gを測り、薄い作りとなっている。方孔は丸みがあり「寶」の字はかなり潰れている。字体から古寛永である。2は面径2.4cm、輪の厚さ1.35mm、重さ3.6gを測り、1よりも遺存状態が良い。方孔は研磨によって丸みを帯びている。字は全体的にかなり潰れ、これは度重なる鑄造によるものである。字体から古寛永である。

第3節 第2次調査

a 遺構と遺物

SK01

調査区北壁中央で検出した、三角形状を呈する土壌である。長さ86cm、幅76cm、深さ44cmを測る。西から南にかけて二段掘り状になっているが、埋土は暗灰色粘質土礫混じり（礫層に近い）1層のみである。整地土中からは土壌の輪郭を確認できなかったため、少なくとも整地土造成時に一気に埋められたものと考えられる。遺物の出土は図示した3個体のみで、いずれも墳底近くから出土した。

20-1は伊万里系染付碗である。口径8.1cmを測り、外面に草花が描かれている。呉須のコバルトの発色が悪く黒味がかかった藍色を呈し、釉も不透明な感で細かな気泡がみられる。2は伊万里系染付脚付鉢である。脚は欠損しているものの、幅広の蛇の目高台（約4cm）にその痕跡を残している。また高台は釉の掻き取りが見られる。内面に樹木（梅？）が描かれている。呉須の発色は良くきれいなコバルト色である。釉の透明感もある。なお内外面に細かい貫入が見られる。3は肥前系陶器鉢で口径18.4cmを測る。口縁は玉縁状になり、内外面に鉄釉を施している。

SK02

調査区南西隅の土壌である。長さ1.2m以上、深さ10cm強の不定形な落込みで整地土を埋土としている。遺物も僅かしか出ていない。したがって地山の窪みと判断できる。20-4は伊万里系染付で端反り気味の小平である。外面に草と樹木が描かれ、「大明年製」の底銘がある。呉須の発色は良いが、釉に気泡が目立つ。

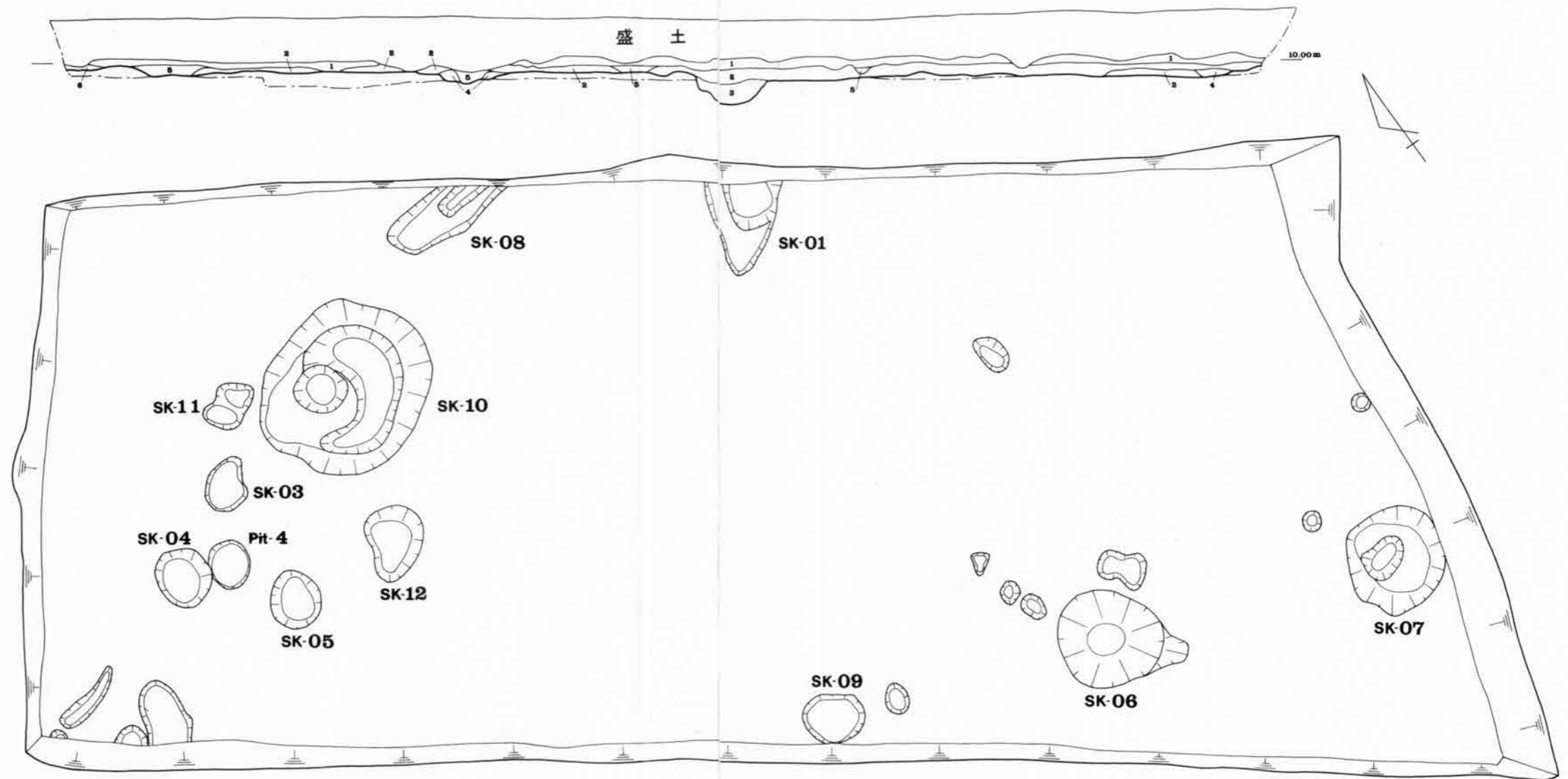
SK03

SK10の南に隣接する。長さ1.04m、幅78cm、深さ35cmを測るいびつな卵型を呈する。埋土は上より淡灰黄色粘質土、黒灰色粘質土、暗黄色粘質土。上2層が礫を含むのにたいし、第3層は2～4cmと薄く人為的に敷いたような土である。遺物は主に第1層から出土した。

20-6は伊万里系染付碗である。口径に対してやや浅い体部である。外面に草が描かれている。呉須のコバルトの発色は良く、釉はやや青みがかり透明感もある。7、8は口径22～23cm、器高2～2.5cmを測り、土師質の皿で焙烙である。7の方に橙色の釉が薄く内面から口縁部外面にかけて施されているものの、ともに内外面に煤が付着している。また、施釉されている方が作りは良い。

SK04、ピット3

SK04は径1m前後、深さ25cmを測る土壌で、東に接して径75cm前後、深さ8cmを測るピット3がある。遺構の切りあいは不明である。ピット3は整地土を埋土としているのに対し、SK04は上2層がSK03と同じで第3層が人為的に敷かれたような淡灰色粘質土である。ともに遺物の出土は少ないものの、SK04と03の埋没状況の類似から同時期のものあるいは同じ機能を持つものと考えることができよう。またピット4は地山の浅い窪みの可能性が高い。



- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 淡灰色砂質土 (シルト的) | 4. 暗黄色粘質土礫混り [整地土] |
| 2. 暗黄色粘質土礫混り [整地土] | 5. 暗灰色粘質土 |
| 3. 暗灰色粘質土礫混り | 6. 暗灰色粘質礫土 [整地土?] |

0 5 m

Fig. 17 第2次調査調査区全体図

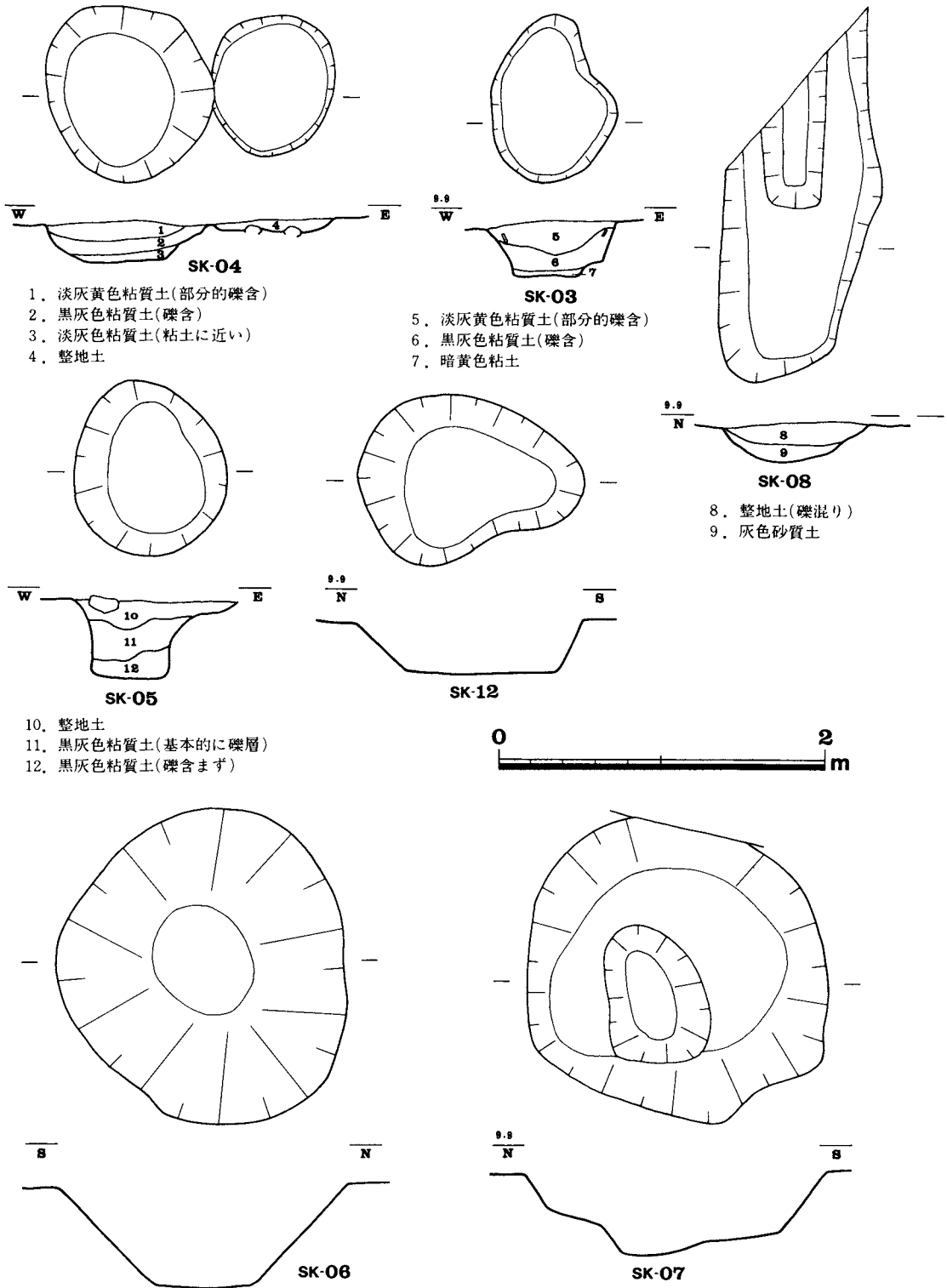


Fig. 18 土坑実測図

SK05

長径1.1m、深さ48cmを測り楕円形を呈する土壌である。埋土は上より整地土、黒灰色粘質土で、礫の有無によってさらに2層に分けられる。この層はSK03やSK04の第2層と同じなので、時間的な同時期を傍証すると考えられる。遺物は主に第1、2層から出土した。

20-14は伊万里系染付皿である。高台の口径に対する割合は1/2.1で、内面に藍色の呉須で果実が描かれている。15は陶器で皿状を呈し中央に吊り手のような突起の痕跡がある。褐色の釉がほぼ全面に施され、底部は糸切りによっている。落とし蓋と思われる。

SK06、07

ともに調査区東にある大型の土壌である。両者とも埋土が礫層で、SK07の方が灰色の粘質土の入る割合が大きくそのために若干締りが良い。いずれにしても締りの悪い礫層である。SK06は径1.9m前後、深さ65cmで播り鉢状を呈する。SK07は径1.8m、深さ52cmを測り、いびつな円形を呈し、壙底も凹凸が見られる。SK06出土土器はほとんどが上面近くから出土しているので、土壌廃棄時の年代を示すと考えられる。また、SK01と埋没状況が類似することから、時期的に近接していると考えられることもできようか。

20-9は伊万里系染付碗でやや深い身を持つ。外面に印判によってスタンプされた松と鳥(?)が描かれ、高台内面に完全に崩れてデザイン化された銘が記されている。「大明年製」と思われる。淡いくすんだコバルト色の呉須で、釉も灰色がかり透明感は少ない。10は京焼系の絵付けされた陶器製丸碗である。高台径3.1cmと小さくかなり丸みをおびた体部である。外面に草花の文様の痕跡があるが色彩は既に落ちている。高台周辺まで黄色の釉が施され、貫入が入っている。11は伊万里系染付磁器で端反りの小杯である。外面にくすんだコバルト色の呉須によって草花が描かれている。

20-12、13、21-2は伊万里系染付皿である。12は口径14.2cm、高台径8.6cmで口径に占める高台の割合は1/1.7である。やや波状の口縁となり蛇の目凹形高台で、匣書きされている銘が見られるが判読できない。内面および見込には菊唐草の文様が描かれ、外面に唐草が描かれている。13の素地はねずみ色で呉須はくすんだ藍色を呈している。見込には印判された五弁花、底には銘が記されているが判読できない。21-2は見込に樹木(梅?)が描かれ、周囲に細かい唐草を描いている。呉須はややくすんだ藍色である。釉は青みがかり透明感がある。21-1は伊万里系染付碗の蓋である。藍色の呉須で印判による2匹1対の蝶を描いている。釉は青みがかり透明感がある。3は水滴である。淡く明るい藍色の呉須と半肉彫りによって装飾している。

4は京焼系陶器碗である。丸みを帯びた体部で口縁は内傾していると考えられる。内面には白い釉、外面には褐色の釉がかけられている。5は小形の青磁仏花器である。6は瀬戸美濃系陶器鉢である。内外面に黄釉が施され貫入がみられる。内面に目跡がある。7は植木鉢である。施釉されていない。

SK08

長方形を呈し、長さ2.4m以上、幅88cmを測る。両側に暗黄色粘質土礫混じり土があり、中心に整地土が落込んでいる。土器はほとんど出土していないので時期は不明である。

SK10

直径2m、最も深い所で58cmを測り、ややいびつな円形を呈する。上面には現代の盛土が及んでおり、もともと多少落込んでいたと思われる。ほぼ中央に径70cmの円形の落ちがあり、それから東側に細長く一段低くなっている。土層断面を見ると細長い落込みが別の遺構であるかのような層の違いが見られるが、この土層の違いは単に礫が含まれるか含まれないかの違いで土色は同じである。つまり、部分的な埋土の違いと判断できる。埋土は上より淡灰黄色粘質土、淡黒青色粘質土、淡青灰色粘質土、暗黄色粘質土礫混じりである。第3、4層は粘性が高く冠水状態で堆積した土と思われる。遺物もこれらからの出土が多く、木器の出土は主に3層上面からである。

染付磁器

21-8~11は碗で、11のみ瀬戸美濃系である他は伊万里系である。8はやや深い体部で腰が張り小さな高台を持つ丸碗である。

見込および外面に蛸唐草を描いている。呉須は濃く濁ったコバルト色で、釉の透明感もなく灰色気味である。

9は8同様小さな高台で深い身を持つようである。見込に樹木(梅)を、外面に唐草を描いている。呉須はくすんだ藍色を呈し、発色も良くない。10は高い高台、直線的な体部で広東碗に近い形態である。見込および外面に文字文を描いている。全体に黄色く変色しており、おそらく被熱によると思われる。釉や呉須の状態は分からない。11は端反り気味で見込と外面に崩れた草の文様(?)と露玉(?)が描かれている。くすんだ色の呉須で釉の透明感はあまりなく青味がかかる。

12は徳利である。肩のみ遺存している。くすんだ藍色の呉須で釉は灰色気味である。素地自体も灰色に近い白色

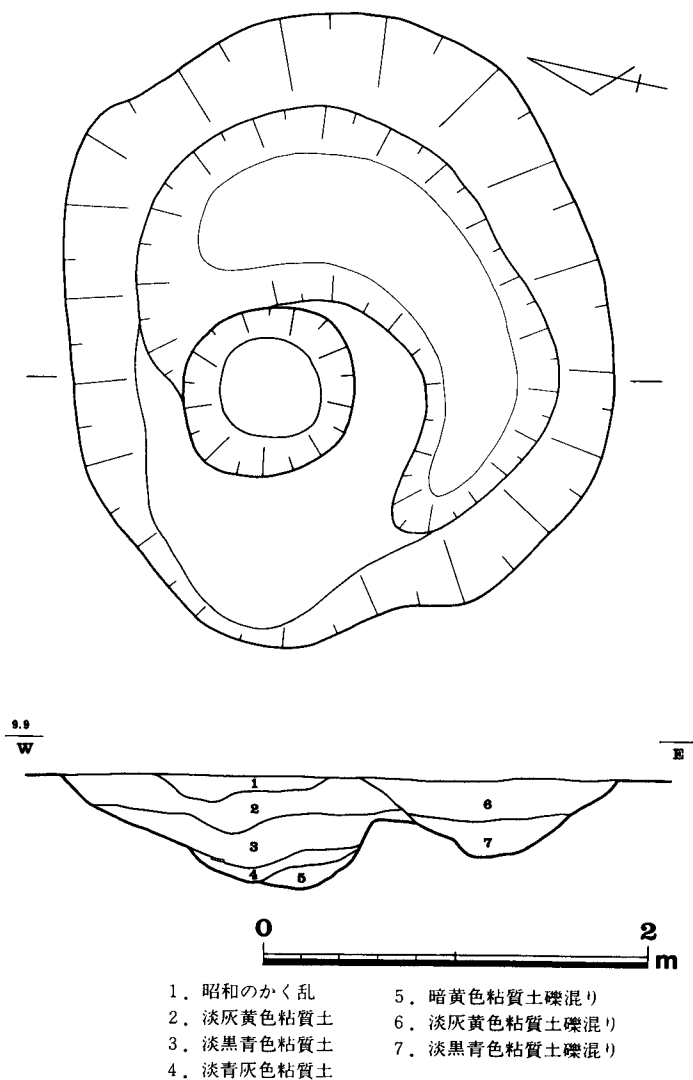


Fig. 19 SK10実測図

で、黒色の微粒子を含んでいる。13は水滴である。一方の破断面に孔があることから、長さ5.5cm程度と思われる。表面は刻むことによって文様を施し、部分的に呉須を塗ってアクセントをつけている。釉は透明感があり、図上で左端面以外に施されている。14はくらわんか手の皿である。口径13.3cm、高台径7.9cm、器高4.1cmを測り、高台の口径に占める割合は1/1.7である。見込に印判による五弁花、側面に樹木(?)を描き、外面は唐草である。淡い藍色の呉須である。底面には銘があり、山の下に福の草書体を崩した字と思われる。15は鉢である。口径21.9cmを測り、小さな波状の口縁である。呉須は藍色を呈し発色も良い。釉は青味がかり透明感もある。口縁端部は鉄釉によって装飾されている。

陶器・土器

22-1、2は肥前系の陶器碗である。口径9.4cm、高台径3.6cm、器高5.9cmを測る。素地は暗灰色を呈し緑灰色の釉で畳付け以外に施されている。釉のむらが著しい。2は1よりもやや浅いタイプで黄灰色の釉が施されている。釉のむらが著しい。3は土師質の灯明皿である。全面ナデ成形で口唇部に油煙が付着している。

22-4は吊手付き土鍋である。吊り手の断面は円形で横に長く貼りつけ、底部に小さな脚が付く。褐色の釉が外面底部以外に施され、素地は白っぽい灰黄色である。無釉のところには煤が付着している。5、6は鉢である。5は肥前系と思われる。身の深い体部で、逆L字状の口縁はやや下方に向いている。素地は暗灰色を呈し透明感のある緑灰色の釉が薄く施されている。内面に目跡の痕跡がある。6は受口状の口縁なので蓋とセットになっていると思われる。受口部分以外に黄色の釉が薄く施され、ほとんど貫入がみられない。7は片口鉢である。肥前系でいわゆる刷毛目唐津である。褐色の釉の上に淡黄灰色と黄褐色の釉を乱雑に塗り付けている。口縁は玉縁状を呈している。8、9は播り鉢で産地はよくわからない。8は暗黄色から暗赤色の色調を呈し須恵器質で硬質である。おろし目は端部近くまで搔き上げられている。9は暗赤色を呈し底部は糸切りによっている。かなり密なおろし目である。

23-1、2、6は植木鉢である。1は口径11.9cm、器高7.4cmを測る小型品である。逆L字状の口縁で直下に褐色の釉で唐草文様をめぐらしている。底部の三方に半円の透かし穴がある。外面に灰緑色の釉が薄く塗られている。素地は黄褐色を呈し硬質である。2の底部には透かし穴がないタイプである。橙色の釉が薄く塗られているが雑で、軟質である。6は2と同じようなつくりだが、それよりも丁寧に作られ、釉もほぼ全面に施されている。軟質である。

3は土師質の甕である。口縁は内側に折返し全てナデ調整が加えられている。内外面に煤が付着している。4は土師質の三足付鉢である。中央に円孔があげられているので、大型の植木鉢と思われる。

ガラス・金属・石製品

23-7は鶏等の餌箱と思われる。滝ヶ原石で作られ、外寸で長さ17cm、幅7.5cm、内寸で長さ14cm、幅4.5cmを測る。鑿痕を多く残し雑な作りである。10、11はガラス製筭である。ともに振りが加えられており10がスカイブルー、11がネイビーブルーを呈する。欠損部分が大きく全形は分からないが、厚さ3~4mmを測る。10の一方が熱を受けて溶解している。12は銅製匙である。ス



Fig. 20 第2次調査各遺構出土遺物(1)

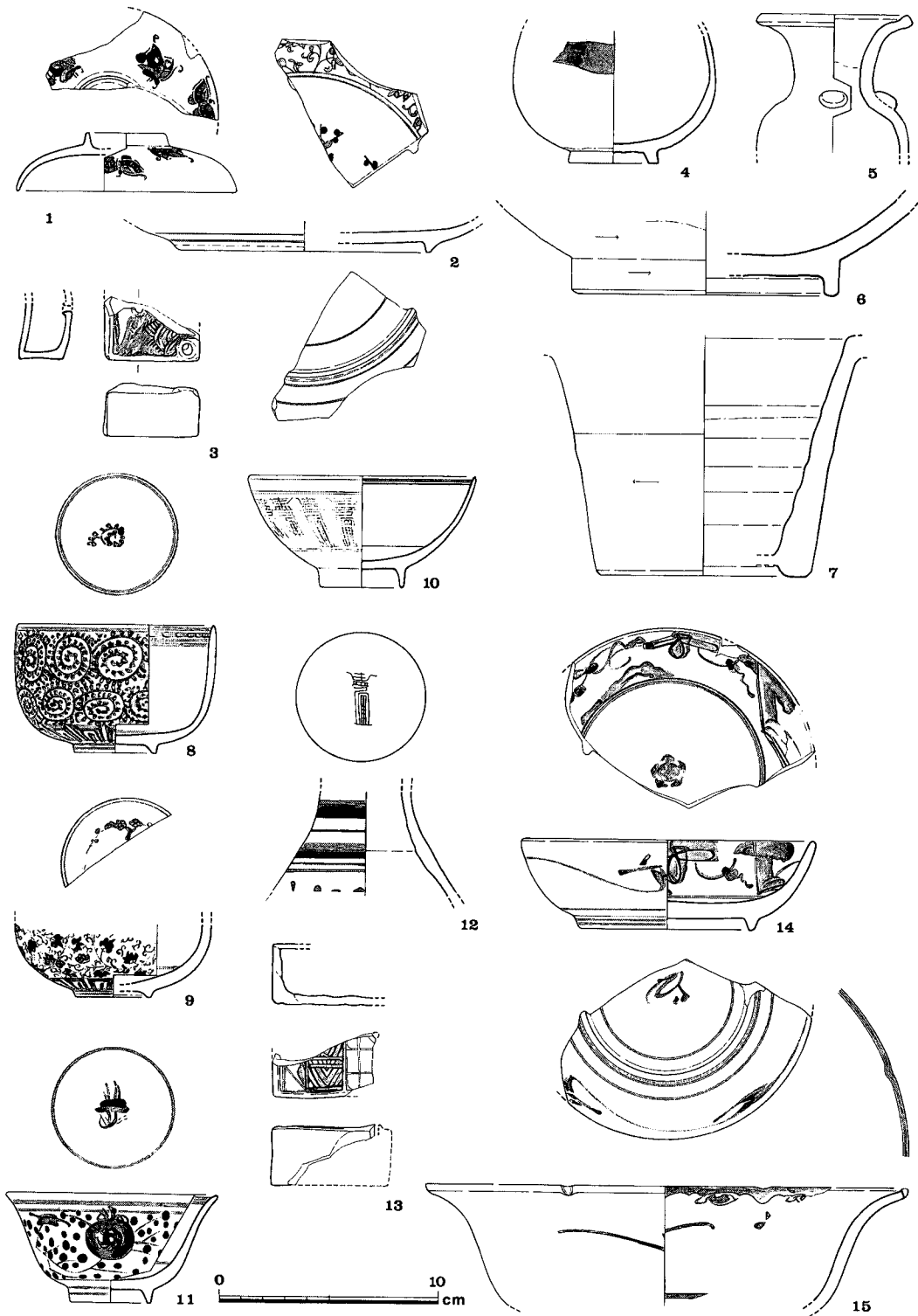


Fig. 21 第2次調査各遺構出土遺物(2)

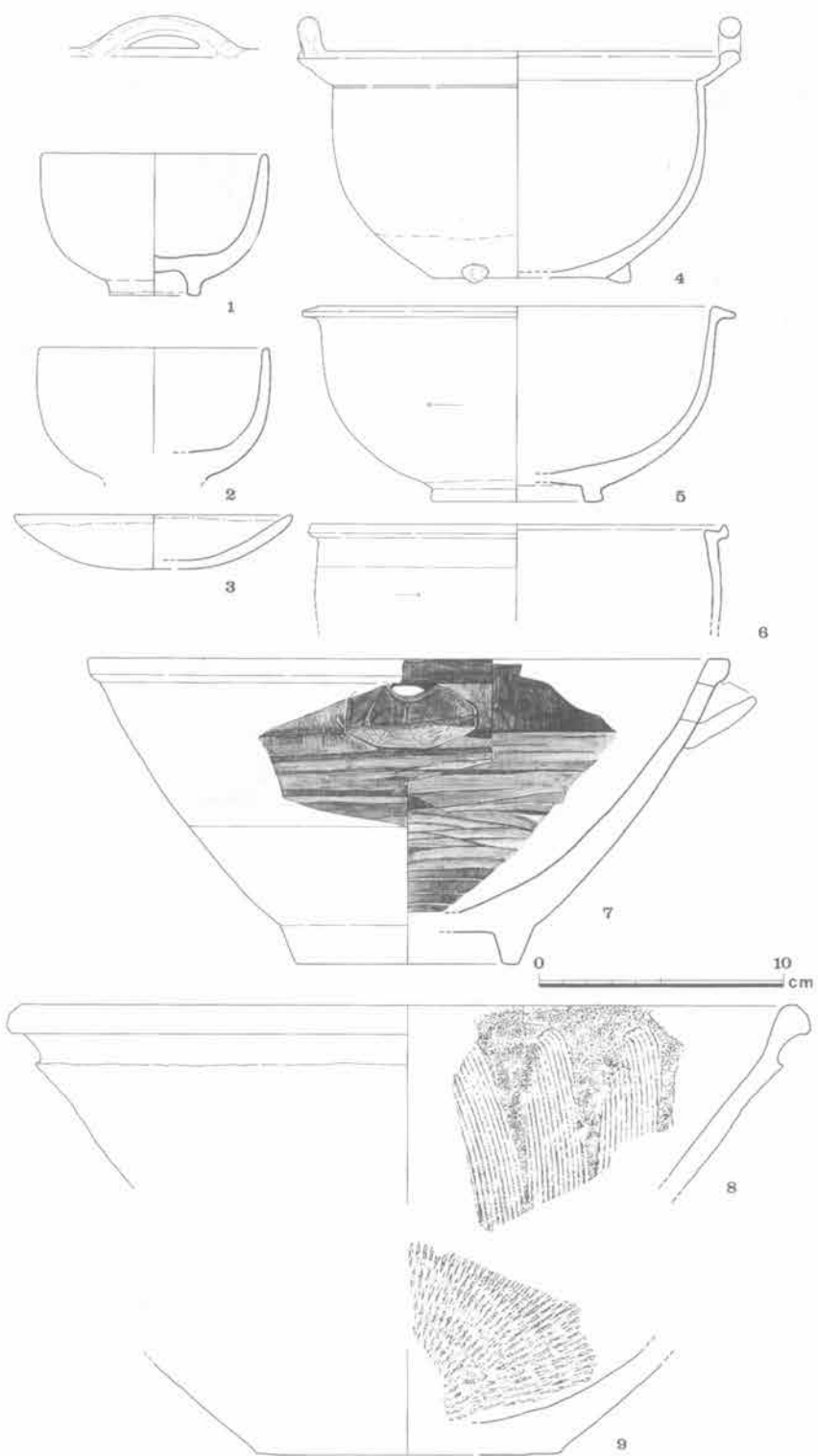


Fig. 22 第2次調査各遺構出土遺物(3)

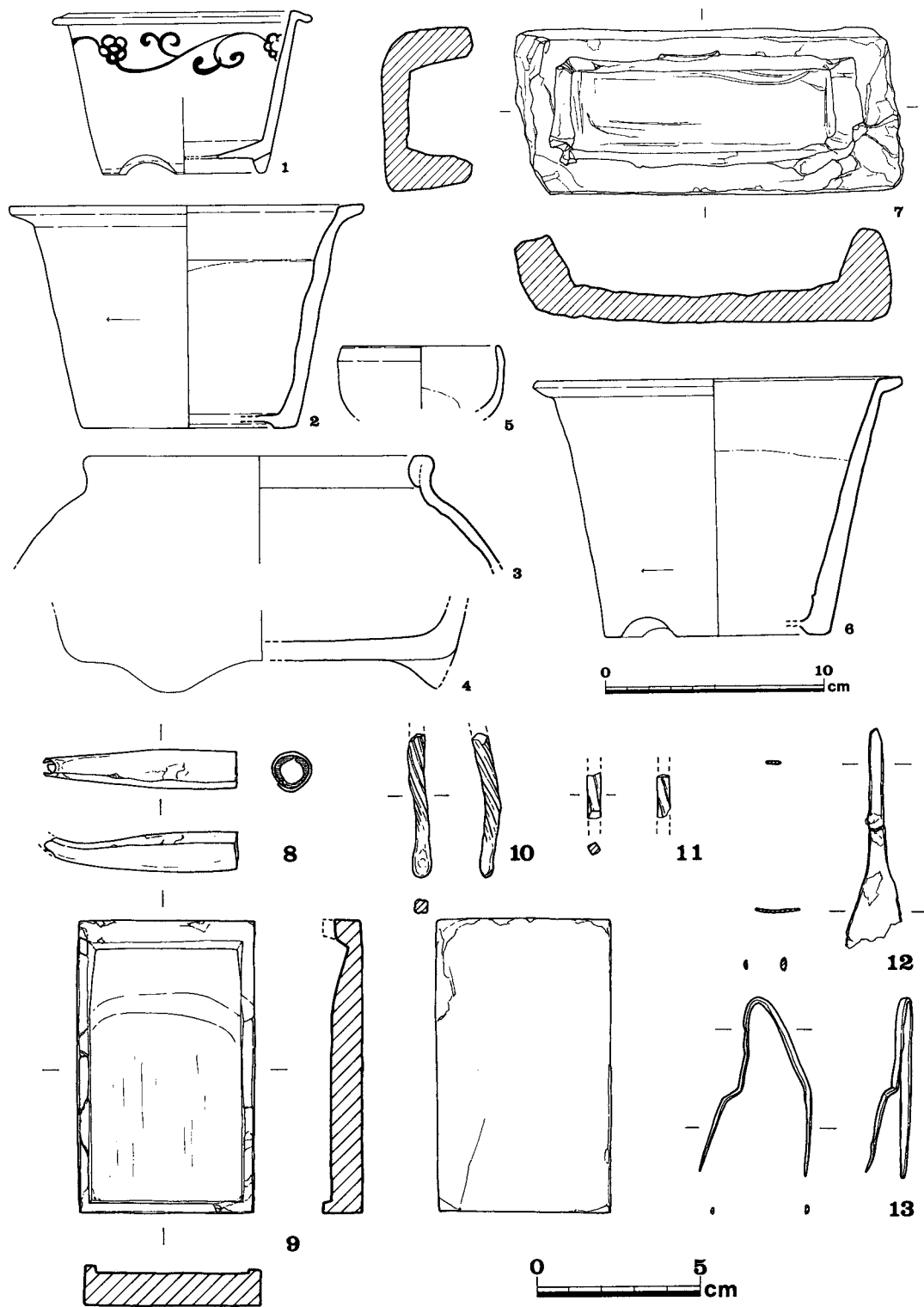


Fig. 23 第2次調査各遺構出土遺物(4)

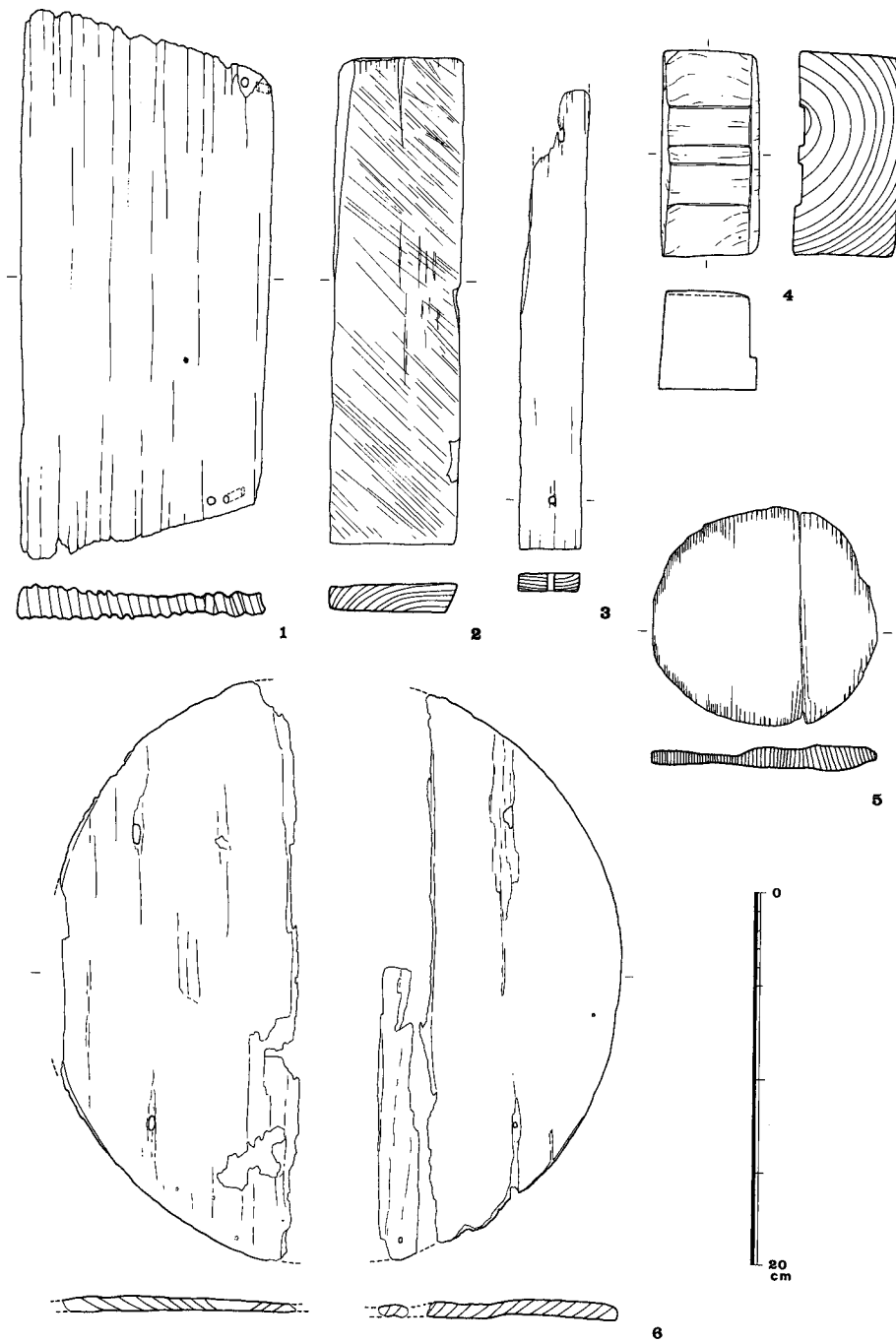


Fig. 24 S K10出土木器

ブーン状を呈し、銅板を打ち延べして作ったもので、厚さ1～1.5mmを測る。メッキの痕跡はない。

木器

24-1は厚さ2cmを測る板材で、図面での左右が欠損し、上下が斜にカットされている。右てには2個1対の径5mmの孔が斜方向にあけられ緊縛する機能が考えられる。何の部材か不明である。2は長さ26.1cm、幅7cm、厚さ2.5cmを測る板材である。表面はきれいにカンナがかけられ、斜方向に刃物による擦痕が多くみられる。3は幅3cm強、厚さ1cmを測る板で、一方が欠損しているため全形は不明である。横幅のほぼ中央に孔があり釘穴かと思われる。4は敷居の破片で、鋸によって5.2cmに切られている。幅は11cmを測る。障子を通す溝が幅2cm、深さ3mmで2条作られている。5、6は桶の底と思われる。ともに1cm程度の厚みがあるが、5の径が11.7cm、6が31cmを測る。いずれも節穴以外の孔はない。

SK12

平面形はSK03とよく似ており、一回り大きい。埋土の状況も同じである。碗のみ出土している。23-5は磁器質で産地はよく分らない。淡灰緑色の釉を全面にかけている。

b 整地土出土遺物

磁器

25-1～4は碗である。1は瀬戸美濃系で口径10.6cmを測り、直線的な体部で高台は小さい。くすんだ藍色の呉須で草を描いている。「升山製」と銘がある。近代の攪乱の混入物と思われる。2は見込に太陽(?)と兎を描き、高台周囲に雷文と花を交互に配している。やや淡い藍色の呉須で釉も透明感がある。「天明成化年製」の底銘がある。3は見込に若杉を描き、呉須はくすんだ藍色である。外方に張り出すような高台内に「富貴長春」の銘がある。4の素地は暗灰色を呈しそのために呉須も灰色気味の藍色で、全体として暗灰色を呈する。内外面に細かい貫入が見られる。

5は瀬戸美濃系(?)合子である。蓋受け部分は無釉である。くすんだ藍色の呉須で菊を描き、釉は透明感がある。気泡を多く含み文様は不鮮明である。6は仏飯碗である。釉は厚く釉溜まりが見られ、呉須は淡く灰色気味の藍色を呈している。7は色絵付け小皿である。口径9.2cm、高台径6.3cm、器高2.5cmを測る。赤で文様の縁取りをし、黄色、緑色の釉を少し用いている。赤呉須はくすんだ朱色を呈する。素地は灰色に近い色なので、釉調もそれに近い感じになっている。8は鉢である。「く」の字にまがる口縁を持つ。藍色の呉須で内面に草花を描いている。口縁が弧を描かず直線的なので、箱物と思われる。9は小型の壺の底部である。釉は内面以外に施され、藍色の呉須である。

10は蓋である。鈕の周辺しか遺存していない。淡い藍色の呉須で草を描いているようである。釉は薄く透明感がある。11～15は壺等の蓋で全てかえりを持つ。11と15が唐草を主文としている。他は草花を主としている。11は口径14.1cmを測る大型品である。やや青みがかった釉調である。漆継の痕跡が見られる。12のかえりはかなり内傾している。文様は輪郭を描いてその中を塗っている。13も12と同じ形態である。14、15は小さなかえりを持つ。この3種類のかえりの形態差は

全体的なプロポーションの違いあるいは呉須の色調の違いとなって表れている。

16は鉢である。文様は外面のみに施されている。青みがかった釉調で淡くくすんだ呉須である。底に崩れた字体の「大明年製」銘がある。

17～20、26-1～4は皿である。17は見込に印判による五弁花、周囲に芙蓉を描き外面に唐草、底に「年」が記されており、「大明年製」銘と思われる。やや暗い藍色の呉須である。18の見込には手書きによる五弁花が、底には「製」が記され、「大明年製」銘と思われる。全体的に青っぽい釉調で呉須も鮮やかな藍色である。19の見込に印判による五弁花がある。これは輪郭を印判によって内部をだみで仕上げている。底にハリ支えの痕跡がある。淡い藍色の呉須である。20の内面に印判による五弁花、周囲に草(?)を描いている。淡く濁った呉須である。

26-1は見込に漢詩を記し、蛇の目凹型高台をもつ。焼継の痕跡が見られ、それを示す蛇の目高台部分で朱描きの記号を記している。「夕」のように見える。2は見込に手書きによる五弁花、周囲に山水を描いている。底に小さく方形枠の銘があるが判読できない。呉須は鮮やかな暗い藍色である。4は焼継の痕跡がある。3は色絵付けの磁器で、赤、緑、黄色がみられる。見込に唐草(?)を描いている。赤は明るい濁った朱色である。

5は青磁鉢で蛇の目凹型高台を持っている。6は内外面に釉がかかっている所以鉢かと思われる。底に窯体の砂が付着している。胎土は粗く陶器質である。7は白磁鉢で内面に型押しによる稜が見られる。瀬戸美濃系と思われる。8も瀬戸美濃系白磁で、型押しによって成形、文様を作っている。

陶器

26-9は京焼系(?)碗である。口径に比べて高台径がやや小さく端反りのプロポーションである。釉の溜まりが顕著で全面に貫入が見られる。10は内外面に鉄釉をかけた碗である。瀬戸美濃系である。11は山水文を描いた肥前系の碗で、いわゆる京焼の模作品である。12は京焼系筒碗である。口縁端部の釉が掻き取られているので蓋がつくと考えられる。灰色の釉が施され鉄釉で文様を描いている。全面に貫入が見られる。

13～15は蓋である。13はかえりも小さく偏平な形態である。鉄釉と白泥で菊文様を描いている。釉は合わせ部分以外に施されている。14はかなり高いかえりを持ち厚手の作りである。釉は15同様外面のみに施されている。鉄釉と緑色の釉で文様を描いている。基本的に15と同じ文様構成と考えられる。15はかえりのないもので、小さな空気穴があげられている。

16～18は蓋物である。外面に釉が施され、鉄釉と白泥および呉須で装飾している。草花文である。17は蓋受けを持つ。外面に白泥で装飾し釉をかけている。18は肩部に耳のような突起物を持つものである。文様の痕跡はあるがよくわからない。いずれも貫入は見られない。19、20は肥前系のいわゆる刷毛目唐津である。ともに鉢で20は高い高台に目跡のような痕跡が見られる。

21は吊り手を持つ急須と思われる。口縁端部内面以外に緑色の釉が施されている。22は肥前系刷毛目唐津で橙色の上に白泥をひいている。23は皿あるいは蓋と考えられる。高台(鈕?)に三角形の切込みが見られる。24は肥前系の碗と思われる。高台以外に黄色の釉が施され細かい貫入が見られる。25は外面体部のみに釉が施されていることから瓶のようなものを想定できようか。



Fig. 25 第2次調査整地土出土遺物(1)

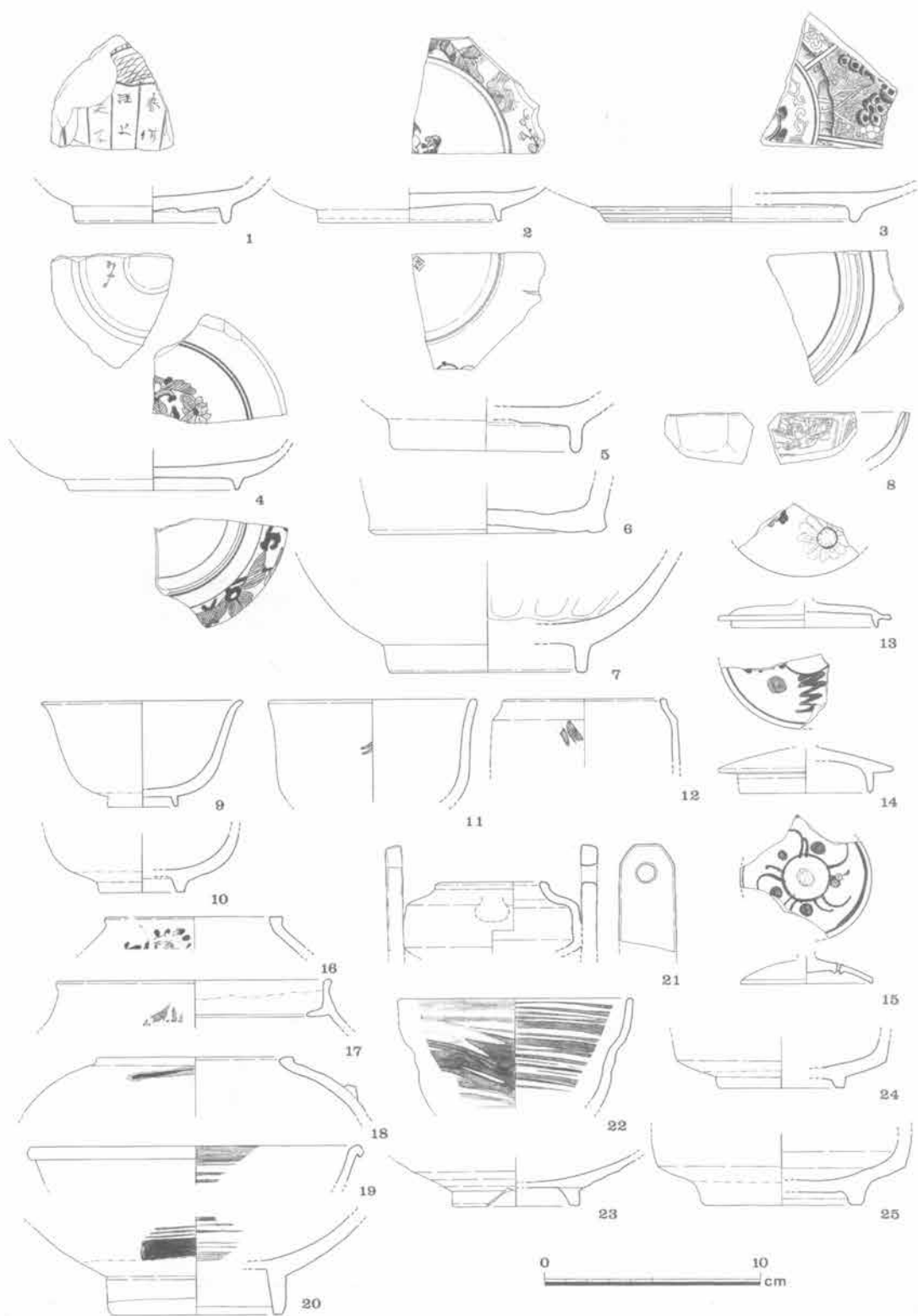


Fig. 26 第2次調査整地土出土遺物(2)

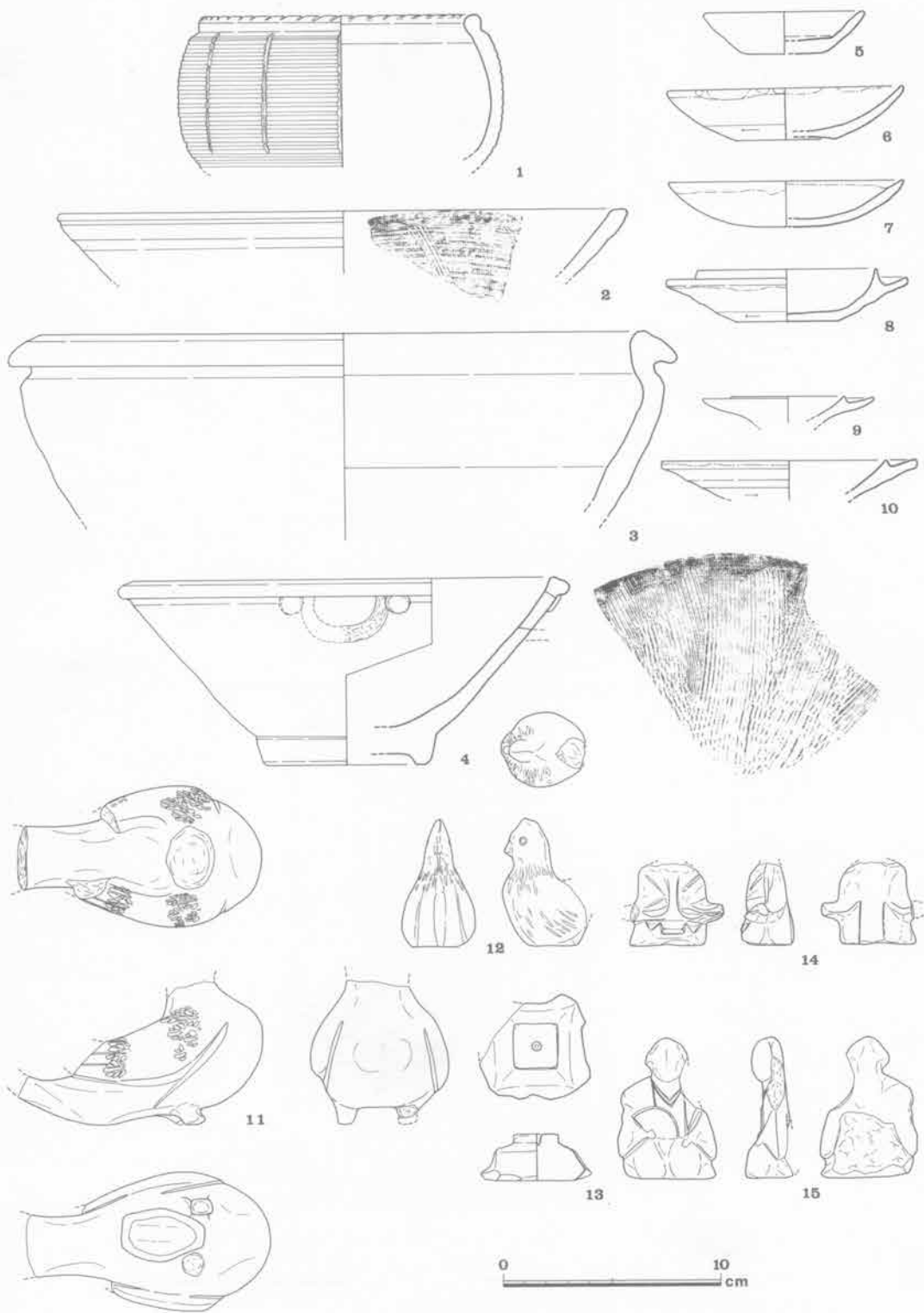


Fig. 27 第2次調査整地土出土遺物(3)

土器・土製品

27-1は瓦質の鉢である。球状に近い体部には横方向の密な沈線と3cmおきの縦の沈線の組合せで装飾し、口縁端部にも刻み目を入れている。2は肥前系で内面に厚く施釉したのち線状に掻き取ることによって刷毛目唐津のような効果をだしている。外面は薄く施釉している。1~2mmの小礫を多く含み粗い胎土である。3は屈曲した逆し字状の口縁を持っている。内外面ともに褐色の釉を薄く塗っている。4は片口の挿り鉢である。暗赤褐色を呈し硬質である。注口部の横に丸い粘土を貼りつけて装飾している。

5~10は灯明具である。5~7が小皿タイプである。5は口径7.4cmと小型だが深い身を持ち器高1.9cmを測る。油煙は1ヶ所のみ付着していることからあまり使われてなかったと思われる。6は施釉で磁器質で細かい貫入が入っている。外面は削りによって成形している。油煙は口縁全体に付着している。7は手捏ねタイプで口縁に厚く油煙が付着している。8は芯受けのあるタイプで、内面に橙色の釉が薄く塗られている。10も同じタイプと思われるが、身の浅い皿状を呈するようである。9は磁器質で内外面に施釉している。ひょうそくである。

11~15は土製品で全て型作りである。11は鳩と考えられるものの頭部や尾羽根の一部を欠損している。底部に大きな穴があいている。翼は刻文によって羽毛を表現しているほか、着色も行っている。かなり剥落しているが、黒色、褐色、赤色、黄褐色が認められる。12は鶏でチャボと思われる。貼りあわせによって作られて中空で足の表現はない。13は灯籠の笠の部分である。14は天神と思われる。中実で底部に径5mmの孔がある。15は羽織りを着た男子で、ちょんまげの表現がみられる。右手に扇子を持っている。これも中実である。

金属製品

23-8は煙管の雁首で、火皿の部分が本体との接合部から欠損している。銅板を丸め本体を作り、メッキの痕跡はない。木質が遺存している。23-9は硯である。長さ9cm、幅5.4cmを測り、通有の粘板岩製である。周囲には粗い擦痕が多くみられ、2次的に付いたものと考えられる。13は銅製ピンセットである。長さ5.5cmを測りメッキの痕跡はない。頭部がやや幅広で先端に行くにしたがって幅を減じている。厚さは1~2mmである。先端の滑り止めのような加工は施されていない。

第3節 立会調査

昭和63年3月17日に実施した試掘調査では、遺物の検出はなかったが遺存状態の良好なベース面(地山面)を確認したので、遺構が残存していないかどうかと言うことで立会調査対応となったものである。

発掘調査の終了した平成元年5月26日以降、工事の進捗状況に合わせて四回の立回調査を実施した。いずれもFig. 28に示すとおり、発掘調査区の東側であり、その一は現JR北陸本線下の掘削時である。北陸本線は現地表から約2mの盛土により築成され、さらに約1mの盛土が見られ、約5~10cmの暗茶褐色砂質土、礫層となる。本来、礫層上層の暗茶褐色砂質土が遺物包含層と考えられたが、別図に示したFig. 29の一点のみの検出であった。

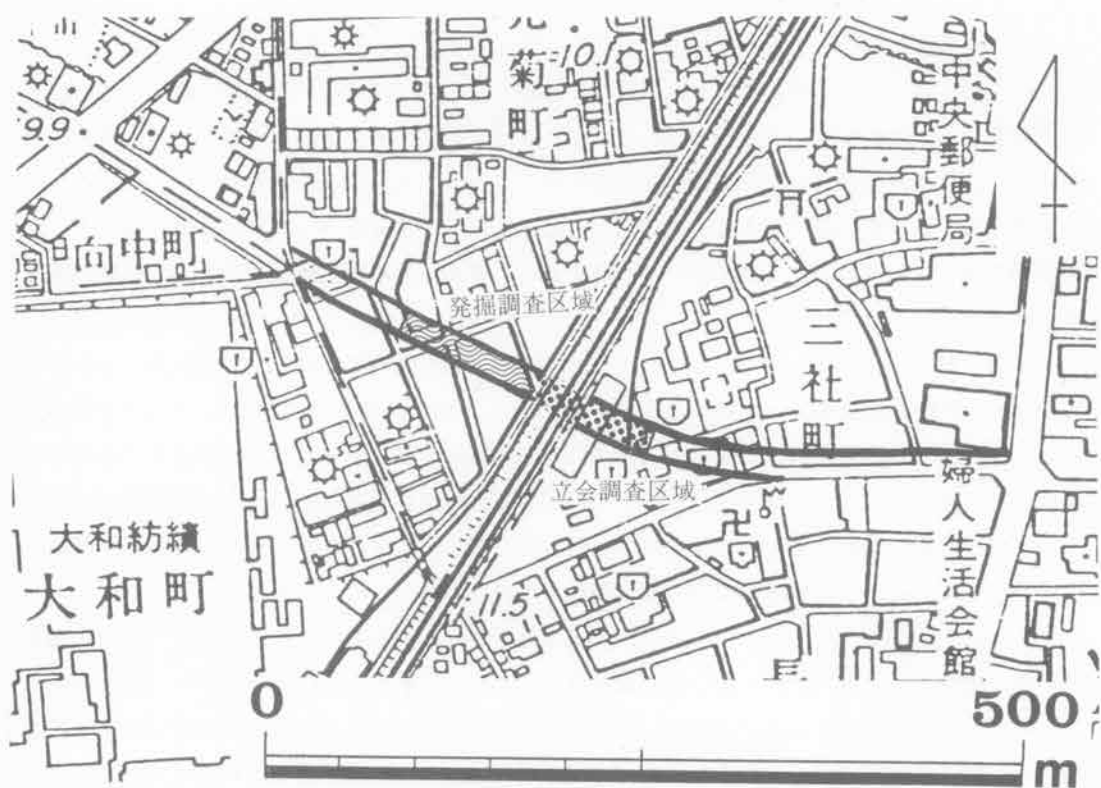


Fig. 28 発掘調査区と立会調査区

このあたりの地点で、発掘調査区の遺構検出面と地山面（礫層上面）とでは約1mの高低差が生じる。さらに、この地点より東側で二回の立会調査を実施しているが、該地は日本通運株式会社の倉庫となっていた所であり、倉庫建設の際の攪乱、建物撤去の際の攪乱などで、先の地点よりは明確にし得なかった。と言うのも、倉庫に保管されていた大量の硬質陶器の破片と石炭粒が混入しており判然とはなし得なかった。遺構についても先の攪乱等により検出されなかった。ただ、遺物では18～19世紀に属すると考えられる細片が少し散見できたことから近世遺跡が所在した可能性は高い。しかし、発掘調査区とは、地形的には約1m強の高低差が見られたことから、性格を異にしたものであったろう。

Fig. 29は瀬戸美濃系染付磁器である。外面に花が描かれ見込みに文字文がある。具須は明るいコバルト色で強いにじみが見られる。釉に気泡が多く入り込み、透明感がある。



Fig. 29 立会調査区出土遺物

遺物観察表

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) () は現存数値	色調・技法・文様	備考
13-1	'87 Eトレンチ 遺構面直上	碗	口径 8.6 高台径 3.5 器高 5.0	呉須は藍色で釉はやや緑っぽく、発色は良い。	
13-2	'87 試掘d 地点 Wトレンチ 客土 '87 Wトレンチ SD-01	碗	口径 8.7 高台径 3.4 器高 5.7	釉はごくうすく灰色っぽく、発色は良い。 呉須の滲みが顕著で見込みに五弁花がある。	
13-3	'89 試掘c 地点 Wトレンチ北東スミ SX-01	碗	口径 10.0 高台径 3.6 器高 5.4	釉はやや緑っぽく、発色は良で、大きく貫入が入っている。	「福」
13-4	'87 Wトレンチ 北半遺構面直上 南半遺構面直上	碗	口径 8.7 高台径 5.4 器高 5.8	釉はやや緑っぽく、発色は良で、部分的に細かい気泡がある。	「大明年製」
13-5	'87 Eトレンチ 遺構面直上	碗	口径 13.0 器高 (5.8)	釉は灰色。呉須は緑っぽい灰色で、発色は良い。 内外面共、貫入があり、内面には釉溜りもある。	
13-6	'87 Wトレンチ 北半遺構面直上	碗	高台径 4.3 器高 (3.55)	釉はオリブ味をおびた灰白色で、うすく均一で透明感がある。 呉須は青灰色から青黒色を程していて、発色は不良である。	
13-7	'87 Wトレンチ SX-01 3区上面	碗	口径 7.9 器高 (4.5)	釉はやや緑っぽく、発色は良で、内外面共に貫入はない。	
13-8	'87 試掘c 地点 Wトレンチ北東スミ SX-01	筒碗	口径 13.6 器高 (7.9)	釉はうすく不明瞭だが発色は良い。	
13-9	'87 Eトレンチ SK-01	碗	高台径 7.8 器高 (3.3)	釉は白色。呉須は濃いめの藍色部分が多く、滲みがややある。 発色は良で、全体にあらゐ貫入がある。	
13-10	'87 SX-01 Wトレンチ3区上面	皿	口径 13.5 高台径 7.0 器高 3.2	釉は均一でなく溜りがみられ、呉須にはやや滲みがある。 若干あらめで深い貫入がある。 見込みにコンニャク判五弁花がある。	「大明年製」
13-11	'87 Eトレンチ SK-01	皿	高台径 7.8 器高 (2.3)	釉は白色で、呉須は明るい藍色。 発色は良で、あらめの貫入がある。 見込みに五弁花がある。	「年製」
13-12	'87 Wトレンチ 北半遺構面直上	皿	高台径 7.2 器高 (1.1)	釉は白色で、発色は良い。	
13-13	'87 試掘c 地点 Wトレンチ北東スミ SX-01	碗	高台径 8.5 器高 (6.2)	釉はやや緑っぽく、発色は良い。	
13-14	'87 Eトレンチ P-2	徳利	高台径 6.8 器高 (5.85)	釉は青味をおびた白色で、うすく均一、気泡を含み、透明感に欠ける。 呉須は淡い藍色で発色は良い。	
14-1	'87 Eトレンチ 遺構面直上	播鉢	口径 30.4 器高 (5.8)	釉はにぶい赤色。 胎土は緻密で焼成は良い。	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	色調・技法・文様	備考
14-2	'87 Wトレンチ SX-01 3区上面	播鉢	底径 10.6 器高 (4.9)	色調は外面赤色で内面にぶい赤色。 胎土は緻密で焼成は良く、回転糸切りがある。	
14-3	'87 Eトレンチ SK-01	大甕	口径 54.9 底径 18.0 器高 54.5	色調はにぶい赤褐色。 胎土は微細から3ミリ大の砂粒を少量含み、焼成は良い。	体部に「刻文」
15-1	'87 Wトレンチ SX-01 3区上面	碗	口径 10.5 器高 (2.45)	釉はうすく全体に均一で、透明感がある。 刷毛目唐津で、貫入は内外面共細かく密である。	
15-2	'87 Wトレンチ SX-01.3	鉢	器高 (3.8)	外面の釉は浅黄色で全面に施されている。 刷毛目唐津。	
15-3	'87 Wトレンチ 北半遺構面直上	碗	高台径 5.6 器高 (2.75)	釉はオリーブ黄で、きわめてうすく均一、透明感がある。 貫入は内外面共に細かく密である。	見込みに胎土目あり
15-4	'87 Wトレンチ 北半遺構面直上	壺	口径 12.2 底径 9.3 器高 (12.8)	釉は黄味をおびた灰白色で、うすく均一わずかに気泡を含む。 唐津鉄絵で、貫入は外面細かく密で内面はなし。	底部割れ口に補修痕あり
15-5	'87 Eトレンチ 遺構面直上	甕	口径 18.0 器高 (8.7)	釉は灰色がかったうぐいす色で、胎土は橙褐色である。	
15-6	'87 Wトレンチ 遺構面直上	火鉢	底径 17.8 器高 (9.0)	釉は淡黄橙色で、胎土は砂粒少なく焼成は良い。	三足
15-7	'87 Wトレンチ 北半遺構面直上	皿	口径 14.8 底径 6.4 器高 3.9	色調は淡黄色で、胎土は砂粒少なく焼成は良い。	口縁部にすす付着
15-8	'87 Wトレンチ SX-01 下東部	灯明皿	口径 11.8 底径 7.5 器高 1.8	色調は橙色。胎土は緻密で焼成は良い。	口縁部にすす付着
15-9	'87 Wトレンチ P-10 およびその周辺	灯明皿	口径 11.8 底径 4.0 器高 2.2	色調は灰黄褐色。 胎土は緻密で焼成は良い。	
15-10	'87 Wトレンチ 北半遺構面直上	灯明皿	口径 12.4 底径 3.9 器高 2.7	色調はにぶい橙色。 胎土は緻密で焼成は良く、施釉で貫入がある。	底部にケール状のもの付着
15-11	'87 Wトレンチ SD-01 2区上面	灯明皿	口径 4.4 底径 2.7 器高 2.2	色調は淡黄橙色。 胎土は砂粒少なく焼成は良い。	
15-12	'87 Wトレンチ SX-01 2区上面	灯明皿	口径 4.5 底径 2.8 器高 2.2	色調は淡赤橙色。 胎土は砂粒少なく焼成は良い。	
15-13	'87 Wトレンチ 北半遺構面直上	土人形 (天神)	巾厚 7.0 高 2.2 3.9	色調は淡橙色。 胎土は砂粒含まず焼成は良い。	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	色調・技法・文様	備考
15-14	'87 Wトレンチ SX-01 上面	面子 (?)	径 3.8 厚 1.4	色調は橙色。 胎土は砂粒少なく焼成は良い。 中央部に直径5ミリの穴が貫通している。	
15-15	'87 Wトレンチ SX-01	(かざし) 簪	長さ 11.8 巾 1.1 厚 0.15		
15-16	'87 Wトレンチ (北半) 遺構面直上 (北半) SX-01 3区上面	(こがし) 弁	長さ 9.1 巾 0.4 厚 0.25		べっこう製
15-17	'87 Wトレンチ SX-01 2区上面	煙管の 吸口	長さ 5.1 口径 1.0 径 0.3		
16-1	'87 Wトレンチ (北半) 遺構面直上	銭貨 (寛永 通宝)	径 2.1		
16-2	'89 2次 遺構面直上	銭貨 (寛永 通宝)	径 2.3		
20-1	'89 SK-01	碗	口径 8.1 器高 (5.0)	釉は青味がかった白色で、呉須は灰色が かった藍色。	
20-2	'89 SK-01	脚付鉢	器高 (2.4)	釉は緑がかった灰白色で、透明感がある。 呉須は濃い藍色で、発色は良く、貫入が ある。	三足か (?)
20-3	'89 SK-01 下層	鉢	口径 18.4 器高 (4.3)	釉は赤黒色で施されている。 胎土は緻密で焼成は良い。	
20-4	'89 SK-02 整地土層	そばち よこ	口径 7.2 高台径 3.5 器高 5.1	釉は青味がかった白色で、呉須は深い藍 色。	底銘あり
20-5	'89 SK-07	灯明皿	口径 10.8 底径 5.0 器高 2.0	色調は内面淡黄橙色で外面にぶい黄橙色。 胎土は砂粒少なく、焼成は良い。	口縁部に油 煙付着
20-6	'89 SK-03 埋土	碗	口径 9.0 器高 (4.4)	釉は青味がかった白色で、呉須は明るい 藍色。	
20-7	'89 SK-03	焙烙	口径 22.0 底径 15.9 器高 2.0	色調は外面淡黄橙色、内面橙色であり、 薄く釉が施されている。 胎土は緻密で焼成は良い。	底部と側面 にすず付着
20-8	'89 SK-03 埋土	焙烙	口径 22.8 底径 12.8 器高 2.5	色調は淡黄橙色。 胎土は砂粒少なく、焼成は良い。	全面にすず 付着
20-9	'89 SK-06	碗	口径 9.1 高台径 4.6 器高 6.6	釉は青味がかった白色で、呉須はうすい 藍色。発色は不良である。 コンニャク判による施文がみられる。	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	色調・技法・文様	備考
20-10	'89 SK-06	碗	高台径 3.1 器高 (5.5)	色調は淡白オリーブ色で、焼成は良い。 絵付の痕跡がある。	
20-11	'89 SK-06	磁瓶	口径 7.2 器高 (4.2)	釉は青味がかかった白色で発色は良い。	
20-12	'89 SK-06	皿	口径 14.2 底径 8.6 器高 4.5	釉は青味をおびた白色。 呉須は濃い藍色で、発色は良い。 波状口縁に凹部が8ヶ所ある。	底銘あり
20-13	'89 SK-06	鉢	底径 8.6 器高 (2.9)	釉は青灰白色で呉須は灰色がかかったうすい藍色。 見込みにコンニャク判の五弁花がある。	底銘あり
20-14	'89 SK-05 整地土層	皿	口径 13.6 高台径 6.6 器高 (2.4)	釉は青味がかかった白色で発色は良い。	
20-15	'89 SK-05	灯明具 (?)	口径 10.8 底径 5.0 器高 1.7	色調は外面明赤褐色、内面暗赤褐色で釉が施されている。 胎土は緻密で焼成は良い。 底部に回転糸切り痕がみられる。	
21-1	'89 SK-06	蓋	口径 10.0 つまみ径 3.6 器高 2.7	釉は青味がかかった白色。 呉須は藍色で発色は良い。	
21-2	'89 SK-06	皿	高台径 11.2 器高 (1.4)	釉は青味がかかった白色。 呉須は濃い藍色で発色は良い。	
21-3	'89 SK-06	水滴	長さ 4.4 巾 (2.9) 厚さ 1.9	釉は青味をおびた白色で呉須は藍色。	
21-4	'89 SK-06	碗	高台径 4.1 器高 (6.0)	色調は外面にぶい赤褐色、内面灰白色で焼成は良い。	
21-5	'89 SK-06	仏花器	口径 6.6 器高 (6.3)	釉は緑灰色である。	
21-6	'89 SK-06	鉢	高台径 12.1 器高 (4.5)	色調は外面淡黄橙色、内面淡黄色で釉が施されている。 焼成は良く、瀬戸である。	見込みにト チン痕あり
21-7	'89 SK-03	植木鉢	底径 9.4 器高 (11.1)	色調は淡黄褐色で釉が施されている。 胎土は砂粒が少なく、焼成は良い。	
21-8	'89 SK-10 上層	碗	口径 9.0 高台径 3.7 器高 5.9	釉は青味をおびた白色でうすく、気泡を含み透明感に欠け、光沢がない。 呉須はやや濃い紺で、発色は不良である。	
21-9	'89 SK-10 上層	碗	底径 3.4 器高 (3.35)	釉は青味をおびた白色で比較的あつく、気泡を含む。 呉須は紺色で発色は不良である。 内外面共に貫入はない。	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	色調・技法・文様	備考
21-10	'89 遺構面直上	碗	口径 10.5 高台径 2.8 器高 5.1	呉須は藍色で、やや滲みがある。 文字文が見込みにもある。	
21-11	'89 SK-10 上層	碗	口径 9.6 高台径 3.7 器高 5.1	釉は青味をおびた白色で、うすく均一で 気泡が多く、透明感がない。 呉須の発色は不良であり、内外面共に貫 入がない。	
21-12	'89 SK-10 上層	徳利	器高 (4.6)	釉は青味をおびた白色で、うすく均一、 透明感に欠ける。 呉須の発色は不良で、貫入はない。	
21-13	'89 SK-10 上層	水滴	長さ (4.7) 巾 (2.95) 厚さ 2.8	釉は青味をおびた白色でうすく、気泡を 含み透明感に欠る。 呉須は淡い紺色でやや滲みがあり、発色 は並である。	
21-14	'89 SK-10 上層	皿	口径 13.3 高台径 7.9 器高 4.1	釉は青味をおびた白色で、うすく均一で やや透明感に欠ける。 呉須は淡い紺色で発色は悪い。 見込みにコンニャク判五弁花がある。	底銘 渦「福」
21-15	'89 SK-10 上層	鉢	口径 21.9 器高 (5.6)	釉は青味をおびた白色で、うすく均一、 気泡を含み、透明感に欠ける。 呉須に滲みがあり、発色は良い。 内外面共に貫入はない。口錆がある。	
22-1	'89 SK-10 中層	碗	口径 9.4 高台径 3.6 器高 5.9	色調は緑灰色で釉が施されている。 焼成は良い。	
22-2	'89 SK-10 上層	碗	口径 9.4 器高 (5.5)	釉は灰黄色で焼成は良い。	
22-3	'89 SK-10 上層	灯明皿	口径 11.4 底径 4.0 器高 2.3	色調は橙色。 胎土は緻密で焼成は良い。	口縁部 油煙付着
22-4	'89 SK-10 P-1	土鍋	口径 18.2 底径 7.2 器高 11.0	釉は茶色でつやがある。 把手付である。	底部 すず付着
22-5	'89 SK-10 上層	鉢	口径 17.8 高台径 7.0 器高 8.1	釉はオリーブ色で焼成も良い。	
22-6	'89 SK-10 上層	鉢	口径 17.1 器高 4.1	釉は外面にぶい黄褐色、内面明黄褐色で 焼成は良い。	
22-7	'89 SK-10 P-2	片口鉢	口径 26.4 高台径 9.3 器高 12.7	釉は褐色で焼成は良い。 刷毛目唐津である。	
22-8	'89 SK-10 上層	播鉢	口径 33.0 器高 (7.7)	色調は内外面共、茶褐色である。	
22-9	'89 SK-12	播鉢	底径 12.6 器高 (4.5)	色調は暗赤色で底部に回転糸切り痕がみ られる。 胎土は緻密で焼成は良い。	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	色調・技法・文様	備考
23-1	'89 SK-10 上層	植木鉢	口径 11.9 底径 7.5 器高 7.4	色調、釉は淡灰オリーブ色で文様はこげ茶色。 底部に穴がある。	高台に切り込みあり
23-2	'89 SK-10 P-3	植木鉢	口径 11.3 底径 9.8 器高 10.3	釉は淡橙色で胎土は砂粒を含まず焼成は良い。	
23-3	'89 SK-10 上層	甕	口径 16.2 器高 (5.2)	色調はにぶい黄橙色で、胎土は砂粒少なく焼成は良い。	すず付着
23-4	'89 SK-10 上層	植木鉢 (三足)	底径 16.2 器高 (3.7)	色調は淡橙褐色。	
23-5	'89 SK-12	碗	口径 7.3 器高 (3.3)	釉は外面緑灰色で内面明緑灰色と赤橙色。 胎土は緻密で焼成は良い。	
23-6	'89 SK-10 P-3	植木鉢	口径 16.9 底径 10.1 器高 11.9	釉は淡黄橙色で胎土は砂粒含まず焼成は良い。	
23-7	'89 SK-10	鶏のエサ箱	長さ 17.7 巾 7.8 厚 4.3		石製
23-8	'89 遺構面直上	煙管の 雁首	長さ 6.0 口径 1.2 小径 0.55		
23-9	'89 整地土層中	硯	長さ 9.0 巾 5.4 厚 1.25		
23-10	'89 SK-10	筭	長さ 4.4 径 0.6		ガラス製
23-11	'89 SK-10 下層	筭	長さ 1.4 厚 0.3		ガラス製
23-12	'89 SK-10 中層	銅製匙	長さ 6.8 巾 1.6 巾厚 0.5 厚 0.1		
23-13	'89 遺構面直上	銅製 ピンセット	長さ 5.5 巾 0.4		
25-1	'89 整地土層	碗	口径 10.6 高台径 5.3 器高 (5.3)	呉須は藍色で発色は良い。 釉は一部に溜りがみられる。	底銘 「升山製」
25-2	'89 遺構面直上	碗	高台径 4.4 器高 (2.2)	呉須は明るい藍色で発色は良い。 内面にも呉須が部分的にみられる。	底銘 「大明成化 年製」

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	色調・技法・文様	備考
25-3	'89 整地土層	碗	高台径 3.7 器高 (1.7)	釉は青味をおびた白色でうすく均一、わずかに気泡がある。 呉須は淡い藍色。	底銘 「富」
25-4	'89 整地土層	碗	口径 10.8 器高 (4.65)	釉はオリーブ灰色でうすく全体に施されているが透明感はない。 呉須は黒っぽい藍色。 内外面共に貫入があり、細かく密である。	
25-5	'89 整地土層	台子	口径 8.2 器高 (3.5)	釉は青味をおびた白色。 呉須は深い藍色で滲みがあり、発色は良い。	
25-6	'89 整地土層	仏飯碗	口径 7.4 器高 (3.2)	釉は黄味をおびた白色で比較的あつく、斑がみられる。気泡を多量に含み透明感がない。 呉須は淡い紺色で発色は悪い。	
25-7	'89 遺構面直上	皿	口径 11.2 底径 6.3 器高 2.1	釉は灰白色できわめてうすく、透明感があり、内面は全面施釉である。 色絵(赤・黄・緑)である。	
25-8	'89 整地土層	鉢	器高 (2.3)	釉は淡緑色をおびた白色でうすく均一、透明感がある。呉須は藍色でやや滲みがあり、発色は良い。貫入は内面あらく、外面は細かく密である。	
25-9	'89 整地土層	徳利 (?)	高台径 3.6 器高 (5.0)	釉は青味がかかった白色で、内面にはみられない。 呉須は深い藍色で、発色は良い。	
25-10	'89 整地土層	蓋	つまみ径 1.2 器高 (1.55)	釉は青味をおびた白色で、うすく均一、透明感がある。 呉須は淡い藍色で発色は良い。	
25-11	'89 整地土層	蓋	口径 14.1 器高 (3.0)	釉は青味がかかった白色。呉須は明るい藍色で若干滲みがあり、発色は良い。 貫入は外面に若干みられ、内面では細かく多数ある。	断面漆付着
25-12	'89 整地土層	蓋	口径 8.8 器高 (2.1)	呉須は明るい藍色で発色は良い。	
25-13	'89 遺構面直上	蓋	口径 9.3 器高 (2.15)	釉は青味をおびた白色で、うすく均一、透明感がある。 呉須は淡い藍色で、やや滲みがあり、発色は良い。	
25-14	'89 整地土層	蓋	口径 11.5 器高 (2.3)	釉は青味がかかった白色。 呉須は藍色で、発色は良い。	
25-15	'89 遺構面直上	蓋	口径 13.1 器高 (2.95)	釉は青味をおびた白色で、うすく均一、透明感がある。 呉須は淡い藍色で、発色は良い。	
25-16	'89 整地土層(中)	鉢	底径 6.1 器高 (4.2)	呉須は藍色で、発色はやや不良である。 色絵(赤)であり、部分的に釉溜りがみられる。	底銘 「大明」
25-17	'89 整地土層	皿	口径 14.1 底径 7.4 器高 4.1	釉は明緑色をおびた白色で比較的あつく均一、透明感に欠ける。呉須はにぶい藍色で発色は不良である。口縁は輪花で見込みにコンニャク判の五弁花がみられる。	底銘 「年」

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	色調・技法・文様	備考
25-18	89 遺構面直上	皿	底径 10.5 器高 (2.0)	釉は緑がかった白色で貫入はみられない。呉須は藍色でやや青っぽく、わずかに滲みがあり、発色は良い。見込みに五弁花がある。	底銘 「製」
25-19	89 かく乱	皿	底径 8.5 器高 (1.5)	呉須は藍色で青味が強く、発色は並である。見込みにコンニャク判五弁花がある。	
25-20	89 整地土層	皿	底径 8.1 器高 (2.1)	釉は緑がかった白色で見込みに五弁花がある。呉須は藍色で発色はやや不良である。	
26-1	89 整地土層中	皿	高台径 7.2 器高 (1.75)	釉は青味をおびた白色でうすく均一。やや透明感に欠ける。呉須は淡い藍色で発色は良い。	底に朱書
26-2	89 整地土層	皿	高台径 8.6 器高 (1.6)	釉は白色で見込みにコンニャク判の五弁花がある。呉須は暗い藍色で、発色は良い。	底銘あり
26-3	89 Site 整地土層中	皿	高台径 11.7 器高 (1.7)	釉は緑味をおびた白色で比較のあつく均一。気泡を含まず、透明感がある。呉須は藍色で発色は良い。色絵()である。	
26-4	89 遺構面直上	皿	高台径 7.8 器高 (1.9)	呉須は明るい藍色で発色は良い。内面に一部あらい貫入がある。	断面に接着剤
26-5	89 整地土層	鉢	高台径 9.0 器高 (2.5)	青磁。釉は明緑灰色であつく均一、気泡を多量に含み透明感がない。外面の釉は沸いた状態で白濁している。貫入はない。	
26-6	89 遺構面直上	鉢	高台径 11.2 器高 (2.4)	白磁で釉は灰白色である。	底部に砂粒
26-7	89 整地土層	鉢	高台径 9.3 器高 (5.2)	釉は青味をおびた白色で、うすく均一、気泡を含み透明感に欠ける。貫入はない。	内面に蓮弁文
26-8	89 整地土層	多角皿	器高 (2.4)	白磁。釉は青味をおびた白色で、うすく均一、気泡を多量に含み透明感がない。貫入はなく、陽刻文がみられる。	
26-9	89 Site 整地土層中	碗	口径 9.4 高台径 3.3 器高 5.0	釉は灰色がかったうすいオリーブ色で貫入がある。	
26-10	89 整地土層	碗	高台径 4.0 器高 (2.8)	鉄釉である。	
26-11	89 整地土層	碗	口径 9.8 器高 (4.8)	色調は釉ベージュ色で文様黄土色である。細かい貫入がある。	
26-12	89 整地土層	筒碗	口径 7.6 器高 (3.2)	色調は釉うすい灰オリーブ色で、文様こげ茶に近いオリーブ色。貫入がある。	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	色調・技法・文様	備考
26-13	'89 整地土層	蓋	口径 8.0 器高 (1.2)	釉は淡黄灰色で細かい貫入がある。	急須の蓋
26-14	'89 整地土層	蓋	口径 8.1 器高 (2.1)	色調は釉白に近いベージュ色で文様こげ茶とオリーブ色。貫入がある。	
26-15	'89 遺構面直上	蓋	口径 6.1 器高 (1.3)	色調、釉は白に近いベージュ色で文様はこげ茶と緑色。	
26-16	'89 遺構面直上	土びん	口径 8.3 器高 (1.8)	色調、釉はベージュに近い灰オリーブ色で文様はこげ茶と白と青色。	
26-17	'89 整地土層	土びん	口径 12.8 器高 (2.3)	釉は暗い灰オリーブ色。	
26-18	'89 整地土層		口径 9.2 器高 (2.8)	釉はうすい灰オリーブ色。	
26-19	'89 整地土層	鉢	口径 15.5 器高 (1.8)	刷毛目唐津であり、色調は、灰色がかったこげ茶と白に近いベージュ色。	
26-20	'89 遺構面直上	鉢	口径 8.0 器高 (4.7)	刷毛目唐津。	
26-21	'89 整地土層		口径 5.3 器高 (5.1)	色調はオリーブ灰色で釉は比較的あつく斑がある。気泡をわずかに含むが透明感がある。貫入はない。	
26-22	'89 遺構面直上	鉢	口径 11.0 器高 (5.2)	刷毛目唐津で色調は淡いベージュ色と明黄茶色である。	
26-23	'89 遺構面直上	蓋 (?)	つまみ径 6.0 器高 (2.4)	釉は灰オリーブ色で、非常に細かい貫入がある。土なべの蓋か(?)。	
26-24	'89 整地土層	筒碗	底径 5.6 器高 (2.4)	釉はベージュに近い灰オリーブ色。	
26-25	'89 遺構面直上	筒碗	底径 7.2 器高 (3.4)	釉は灰オリーブ色。	
27-1	'89 遺構面直上	鉢	口径 13.0 器高 (7.0)	色調は黒色。瓦質で外面に沈線(横・縦)がある。	
27-2	'89 整地土層	鉢	口径 26.2 器高 (3.1)	釉はあずき色。	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	色調・技法・文様	備考
27-3	'89 整地土層	鉢	口径 30.8 器高 (8.5)	色調、外面は明茶褐色で内面は暗茶褐色である。	
27-4	'89 整地土層	片口鉢	口径 20.8 底器径 7.4 器高 8.5	色調はあずき色。	
27-5	'89 整地土層	灯明皿	口径 7.4 底器径 3.8 器高 1.9	色調は灰白色。 胎土は砂粒少なく、焼成は良い。 指頭痕があり、直径4ミリの赤い礫がある。	口縁部 油煙付着
27-6	'89 整地土層	灯明皿	口径 10.8 底器径 4.4 器高 2.4	釉は淡黄(橙)色で貫入がある。 胎土は緻密で焼成は良い。	貫入部 油煙付着
27-7	'89 整地土層	灯明皿	口径 10.8 底器径 3.8 器高 2.1	色調は淡い黄橙色。 胎土は緻密で焼成は良い。	口縁部 油煙付着
27-8	'89 遺構面直上	灯明皿	口径 11.0 底器径 4.6 器高 2.4	釉は淡黄橙色で釉が施されている。 胎土は砂粒少なく、焼成は良い。	一部に灯明 の痕跡あり
27-9	'89 遺構面直上	灯明具 ひょうく	口径 7.8 器高 (1.3)	釉は灰オリーブ色。	
27-10	'89 整地土層 遺構面直上	灯明皿	口径 11.6 器高 (1.8)	釉は橙色で胎土は砂粒少なく、焼成は良い。	
27-11	'89 整地土層	鳩	長さ (11.2) 巾 6.4 高さ (6.6)	色調は淡黄灰色で一部黒色と茶褐色。 中実	
27-12	'89 遺構面直上	鶏	長さ (3.9) 巾 3.4 高さ 5.9	色調は淡橙褐色で底部から直径3ミリの 穴があり、中は空洞である。	
27-13	'89 遺構面直上	とうろ	長さ (5.1) 巾 (4.8) 高さ (2.2)	色調は淡橙褐色。	
27-14	'89 幕末遺構面	天神	巾厚 (4.3) 厚 (2.3) 高 (3.8)	色調は淡橙褐色。 中実	
27-15	'89 幕末遺構面	男子	巾厚 4.5 厚 (2.2) 高 6.5	色調は淡橙褐色。 中実	
28	'89 立会調査	碗	口径 11.5 台径 4.4 器高 5.7	釉は緑がかった白色で気泡が多い。 呉須は明るい藍色で、強い滲みがあり、 発色は良い。 見込みに文字文がある。	

第4章 総括

発掘調査面積は2ヶ年度を合せても600㎡程度と小さく顕著な遺構すら検出できなかった。しかしバラエティーに富んだ多量の遺物が出土した。つまり伊万里系の染付磁器、肥前系の陶器、瀬戸美濃系の陶磁器をはじめ、灯明具としての土師質小皿、陶磁器小皿、ひょうそく等、越前焼と思われる播鉢や甕、産地不明の土鍋、焙烙などである。また簪、笄や煙管等の嗜好品や硯、水滴、ピンセット、スプーン、砥石等の生活用具、および遊具としての土製人形、面子、箱庭用具等が出土しているので、これらのバラエティーに富む遺物群から当時の下級武士および町人階層の生活の一端を明らかにし得るものである。また、豊富に残されている絵図および明治以降の各種の地図から、当該地域の市街化の過程を追うことができる。そこで、幾つかの項目に分けて検討したい。

調査地と絵図との比定

金沢市立図書館蔵の文化8（1811）年の「金沢町絵図」を基に検証した。当該地域は城下町の縁部にあたる。文政4（1821）年に相對請地であったものが城下に編入されている。つまり地子町として成立発展し、近代以降都市化の激しい部分であり、明治期以降市街化および中小企業の工場地域化し、町割も大きく変化している。その変化は現在なお続いており本文中に引用した地図からも容易に汲み取れる。

旧城下町の町割を知るために、現在（昭和50年前後）から遡って各種の地図を相互比較することにした。最終的には江戸中期にまで遡る必要があると思われるが、調査地周辺の市街形成過程から幕末までを対象とした。基本にした現代の地図は昭和53年の一万分の一の「金沢市都市計画地図」で、比較した地図は明治36年発行（初版は明治33年）の「実測訂正 金沢明細図」（金沢市立図書館蔵）である。明治29年には第九師団指令部がおかれ、同31年には金沢駅が開業し金石への電車が開通している。この地図は新しい金沢の胎動を表現しているものである。

Fig. 30、31を比較するとかなりよく似た状況であることが分かる。用水の流路にしてもそうである。北陸線は市街地をかすめるように敷設され、駅と中心部を結ぶ道はまだできておらず市電も開通前なので、近代都市化されていない幕末頃の街路を色濃く残しているものと考えられる。また、両図の北陸線までの道の対比が比較的容易なのにたいし、それ以西はほとんど追えないのが現状であり、本調査地の前述した市街化の波の大きさを容易に推測できる。

幕末頃の街路の確認は二つの地図を同一縮尺にして重ねあわせるのが最良の方法だが、「金沢明細図」にはかなりのゆがみがあるので、線路の位置や用水の様子と道の形状および交差状況から類推した。確認したものは朱の網をかけてあるものである。多少道の拡幅があるものの、ほとんどの道を確認した。一方、調査地周辺は元の道がかなり細かく切れ対照的である。北陸線によって分断された結果、開発状況が異なったものである。また、調査地周辺が旧藺田町であったこともわかる。

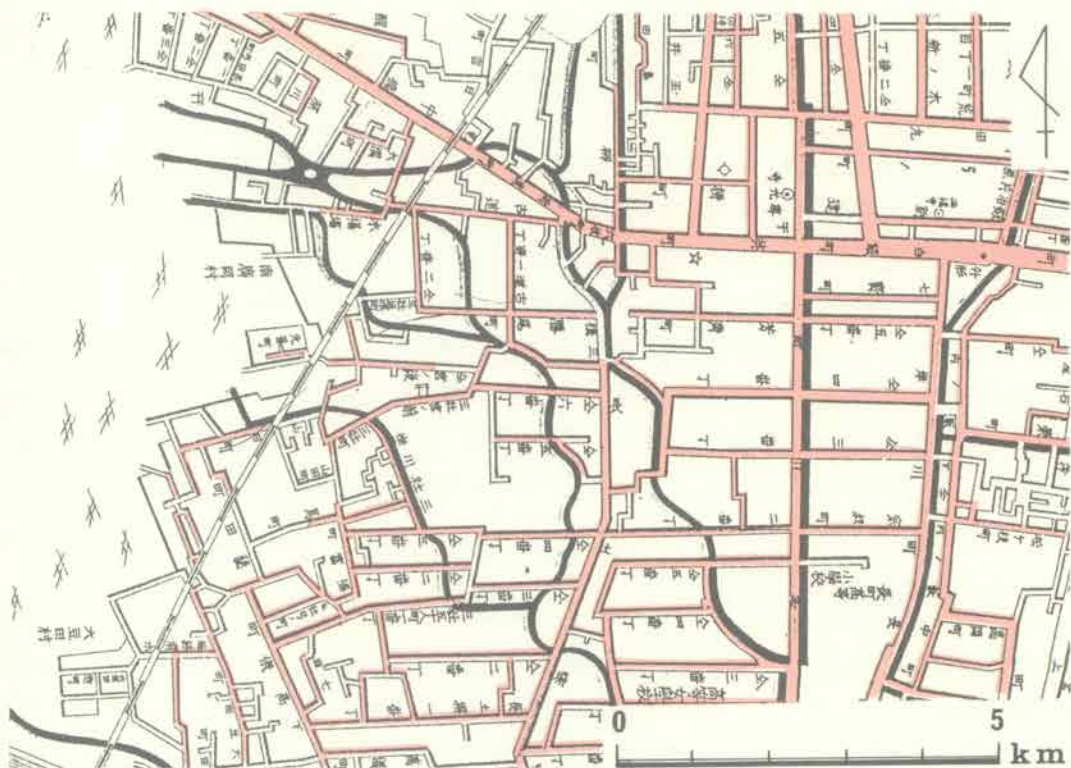


Fig. 30 明治36年発行金沢明細図（部分）

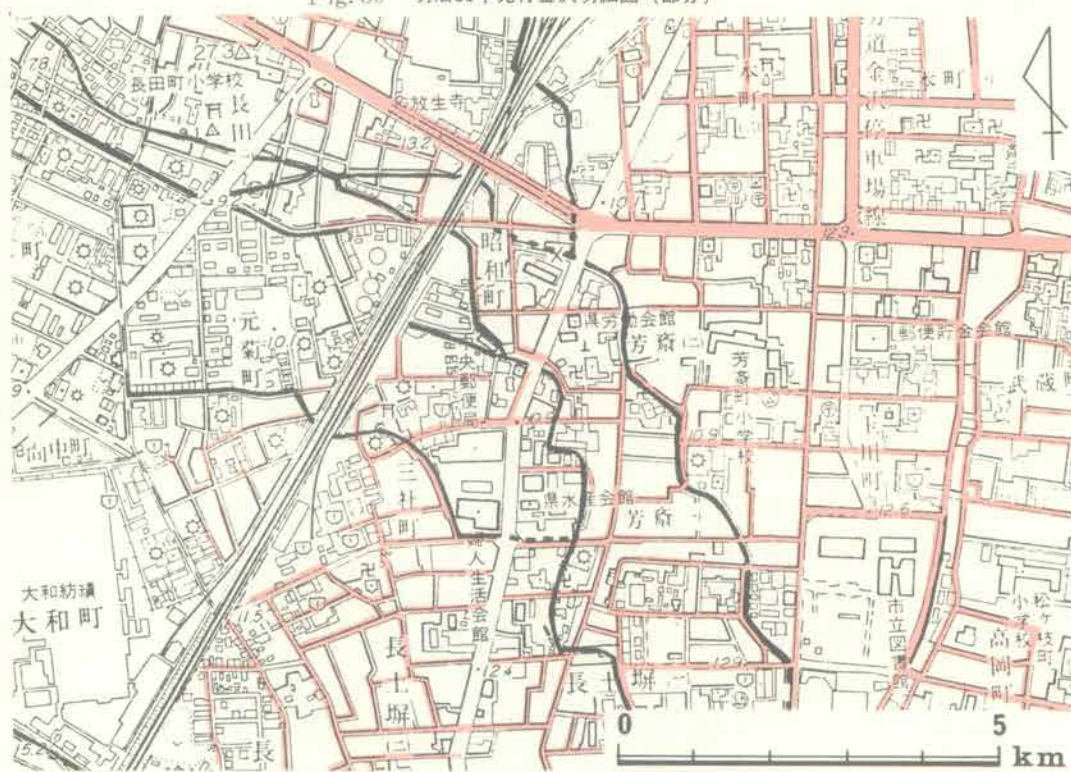


Fig. 31 昭和53年発行地形図（部分）

この地図を念頭にしてさらに細かく調査地の比定を試みたい(Fig. 32)。「金沢町絵図」はA4サイズ相当に折り畳まれた絵図で、藪田町、高儀町、浄住寺町の3町がのっている。いずれも地子町である。地名辞典によると、藪田町は文化8年の家数111で、大正5年には戸数5、人口23になっている。昭和40年代初頭に長土堀2～3丁目、三社、元菊町に編入されている。高儀町は文政6年まで「公儀町」と書いた。長土堀2～3丁目に編入されている。浄住寺前は明治4年に早くも大豆田町に編入されている。

浄住寺と善照坊は現在も存在しており、これを起点にして3つの町の配置から、金沢町絵図の当該部分はほぼ南北の通りを横に描いたものであることが分かる。そして「至三社」の道が五角形に回る道に通じている部分であり、「至大豆田」の道が梅鉢涿水町から大豆田町に通じている部分である。そのように考えるとスクリーントーンを貼った道がほぼ対比できよう。問題は、これらと昭和53年の都市計画地図との対比である。前述したように、北陸線までの比較は容易であるが、それ以西はほとんど不可能である。

絵図には側溝が描かれている(別図中では黒く塗り潰している)。どのような構造であるか判明し難いが、ところどころ橋がかけられていることから、人が普通に歩いて跨ぐことのできない幅、概ね1m前後と考えられる。この溝の終りには奥村源左衛門の請地や元馬場伝左衛門の土地がある一方、溝より西側には水田が広がっているような表現がみられる。第1次調査で検出した溝よりも東側は何回も整地されているようで溝の西側よりも多くの遺物を出土している。このことから絵図に見える溝に比定することも可能である。しかし、感覚的に一万分の一の地図と若干ずれるような危惧も否定できない。ともかく、城下町の一番のはずれの町(下町といえようか)の、しかも町並みの最も端を発掘調査したことになるだろう。

遺構と遺物

筆者の近世考古学に対する基礎知識の欠如によって遺構の識別がかなり困難であった。またベース面が礫層であったことも一因している。このようなことから顕著な遺構は見られなかった。トータルして溝1本、土壇状落込み6基、ピット状落込み十数個、浅い落込み1ヶ所を検出したにすぎない。ほとんどが19世紀に埋没したと考えられるが、第1次調査SX01内のピットや第2次調査のSK01、06、07が18世紀代に遡ると思われる。ただし、SX01内の遺構の埋土は整地土に近いので、時期的に近いと思われる。

整地土からは種々雑多な遺物が出土している。生産地の編年が進んでいる伊万里系染付磁器を中心にみていく。13-10、25-18や19などの見込に印判を施す皿や11-4の印判の碗がある。皿に蛇の目釉剥高台技法のものがみられる。また、いわゆるくらわんか手の碗(13-1、3)や皿(13-10)がある。底銘では「大明年製」や「大明成化年製」、「渦福」の他に「富貴長春」が見られる。これより概ね18世紀代に位置付けられる。

さて、少なくとも江戸では18世紀後半から幕末にかけていわゆる広東碗が流行し、併行して高台の小さいいわゆる丸碗もみられる。本調査からは広東碗の出土は皆無で、丸碗ばかりみられる。11-2は見込に五弁花を描いていることから18世紀代のものであろうか。このように整地土

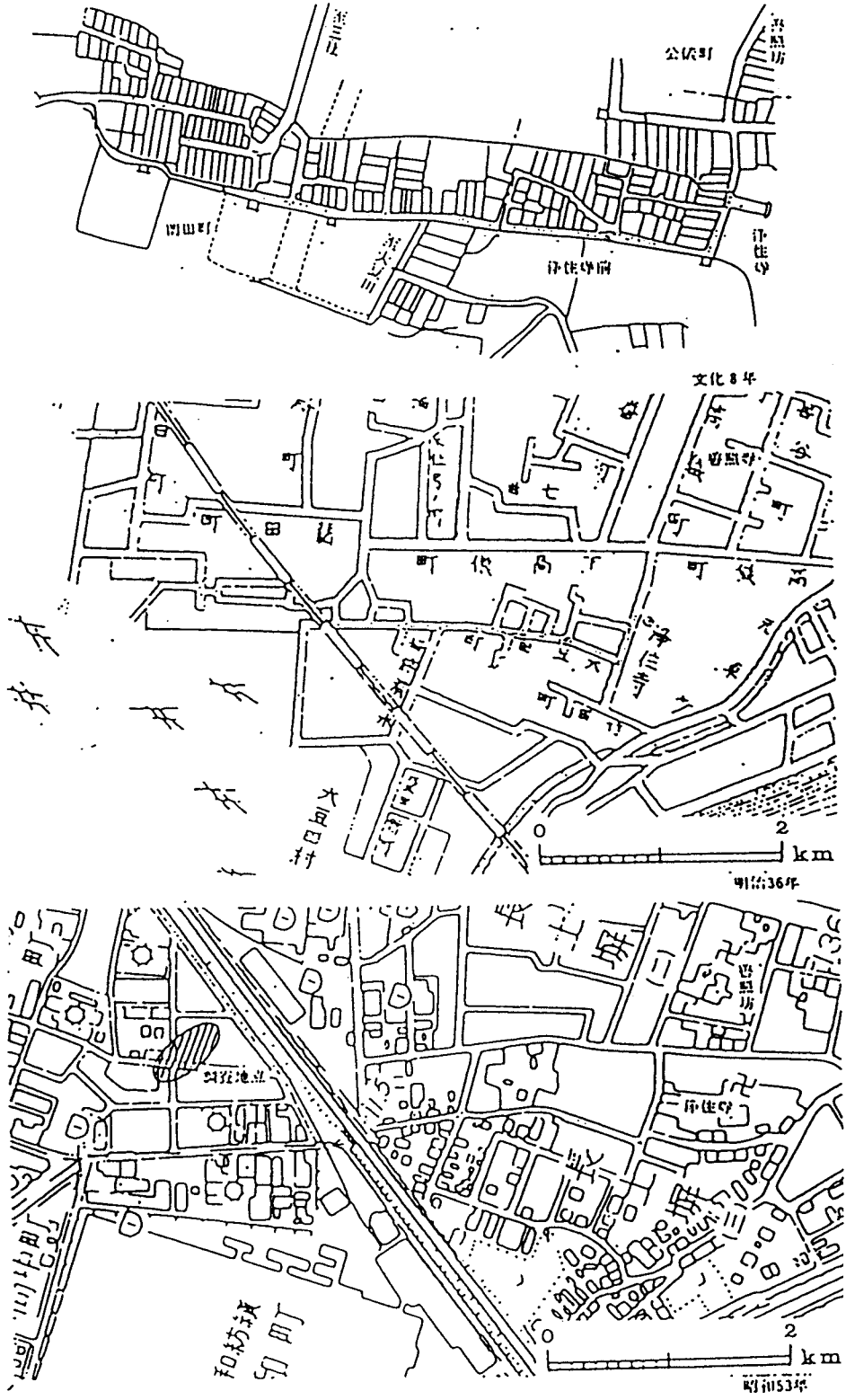


Fig. 32 蘭田町周辺の変遷

出土磁器からでは18～19世紀前半に収るといえる。また、その他の遺物において、土製人形、瀬戸美濃系染付磁器の存在、灯芯立を持つ灯明具の存在など陶磁器からの年代と矛盾するものではない。ただし、統計的に調べる余裕がなかったものの、土器・陶器の方がより新しい遺物、言い換えれば幕末前後のものが多いように感じられた。したがって整地土の年代は18世紀以降幕末までと考えられ、明治時代にははまらないようである。

最も多くの遺物を出土したのは第2次調査のSK06、10である。SK06出土遺物は一気に捨てられたような状況ではないので遺物の一括性はない。遺物はくらわんか手の皿あるいは印判の製品がみられる。反対に植木鉢があり、これを整地土からの混入と理解すると18世紀の遺構と考えられる。ともかく遺構の性格と遺物の出土とは結びつかない。江戸でよく検出される地下式墳とは全く違うし井戸でもない。しいて言えば掘りかけの井戸か樹木の抜取り穴とでも言えようか。

SK10の遺物は墳底から出土したものはなく全て中間層以上から出土しているので、しかも雑多な遺物相から、SK10破棄に伴う遺物群と考えられる。21-14がくらわんか手の皿で五弁花（印判）底に崩れた「福」をもち18世紀後半と考えられるが、多くの遺物は概ね19世紀のものである。すなわち、21-8の丸碗の外面には蛸唐草が描かれ、21-11の端反碗は瀬戸美濃系染付磁器であり、土鍋あるいは植木鉢など19世紀に入ってから盛行するものである。墳底には粘土がありある程度の冠水状態であったと推定されるが、何の遺構なのかよく分からない。類例をまっけて遺構の性格を判断したい。

さて、本遺跡をめぐる幾つかの問題点を列挙したい。

石川県内で、幕末前後の遺構・遺物を出土しているのは加賀市敷地天神山遺跡群F調査区の近世火葬場遺構である（天神山遺跡と略称）。出土陶磁器から元菊町遺跡の時期とほぼ重複することが知られる。陶器よりも磁器の方が多く出土しているようで、磁器はくらわんか手の碗、丸碗、広東碗と筒碗が、あとは広東碗に伴う蓋、皿、瓶が出土している。量的に偏りがみられるようで碗が圧倒的多数を占めている。この傾向は陶器でも同じようである。これらは火葬に伴う供物の容器と考えられているのでこのような器種の偏りがみられて当然と言えるかも知れない。

そこで碗に注目すると、元菊町遺跡にはほとんどみられない筒碗と広東碗が多くみられる。特に調査者の藤田邦雄氏が「当地区においてかなりの比率を占め（中略）ここでは碗以外の用途（たとえば香炉）として用いられたのであろうか」と述べていることに注目できよう。江戸時代の発掘は主に城下町内に実施されていることが多く、いわゆる農村部での調査例はそれほど多くはない。多摩ニュータウンの近世遺跡は農村遺跡であり、東京都埋蔵文化財センターの長佐古真也氏の御教示によれば、そこでは江戸地域に比べて筒碗の占める割合が高いという。天神山遺跡で火葬された人々の階層がわからないものの、城下町と地方との格差と解釈することもできよう。資料の増加をまっけての検討を要する。

江戸でよくみかける遺物に焼塩壺と灰釉徳利（貧乏徳利）があるが、本調査での出土は皆無である。その他はどうであろうか。磁器では広東碗、陶器では唐津系京焼風の若杉碗くらいで、その他はほぼオーバーラップするようである。また、図示していないが、貝型の小さな磁器製紅皿も十数個体出土している。このように生活用具にみられる類似性がうかがわれる。しかし人間の

消費活動の一端を示す焼塩壺と灰釉徳利が欠如しているということは問題である。これからの調査の進展によってこれらが出土することに期待し、同期に江戸と地方都市との違いとして積極的に評価できる可能性にも期待したい。

また、瓦の出土が全くみられないので、金沢の伝統的な「へぎ板葺き石置き屋根」であったと想像され、近世の屋並みを描いている絵図の風景を連想できよう。

おわりに

近世を主目的とする発掘調査報告書をまとめはしたが、調査時における基礎知識の欠如によって発掘ミスをしてしまったと悔やまれる部分が少なからずある。また、陶磁器を見る目がまだまだ養われていないので、江戸の報告書でなされているような緻密な遺物の分析ができなかった。遺構出土の遺物量が少なくほとんどが整地土上面あるいはその中からなので、その考古学的処理の方法を十分につかめなかった。このような失敗をしないように近世遺構を発掘し遺物を扱う必要を感じた。また、兼六園内の近世遺構の発掘でも体験したが、整地土の取り扱いの難しさを痛感した。さらに、文献資料をどのように活用すればよいのかよく分からなかった。石川県立歴史博物館の学芸員村田裕子氏に金沢町絵図の読み下しをお願いしたものの、資料の紹介・提示ということしかできなかったのは、調査者である伊藤の力量不足である。

最後に、本報告書作成に多くの方々から有形・無形の援助を受けて始めて作れたことを付記しておきます。深く感謝いたします。

参考文献

- 動坂遺跡調査会「動坂遺跡」 1978年
石川県立埋蔵文化財センター「敷地天神山遺跡群」 1987年
白金館址遺跡調査会「白金館址遺跡」Ⅲ 1989年
東京大学遺跡調査会「理学部7号館地点」1989年
港区麻布台一丁目遺跡調査会「郵政省飯倉分館構内遺跡」 1986年
都立一橋高校内遺跡調査会「江戸」 1985年
真砂遺跡調査会「真砂遺跡」 1987年
古泉弘「江戸を掘る」 柏書房 1983年
九州陶磁資料館「国内出土の肥前陶磁」 1198年
「有田町史 陶磁編Ⅰ」
「有田町史 古窯編」1988年
大橋康二「18世紀における肥前磁器の銘款について」 青山考古6 1988年
「季刊考古学」13 1985年
「石川県史」2 1974年
田中喜男「城下町金沢〔改訂版〕」弘詢社 58年
田中喜男「金沢町人の世界」国書刊行会 1988年
「日本地名大辞典」17 角川書店 1981年
「図説 石川県の歴史」河出書房新社 1988年

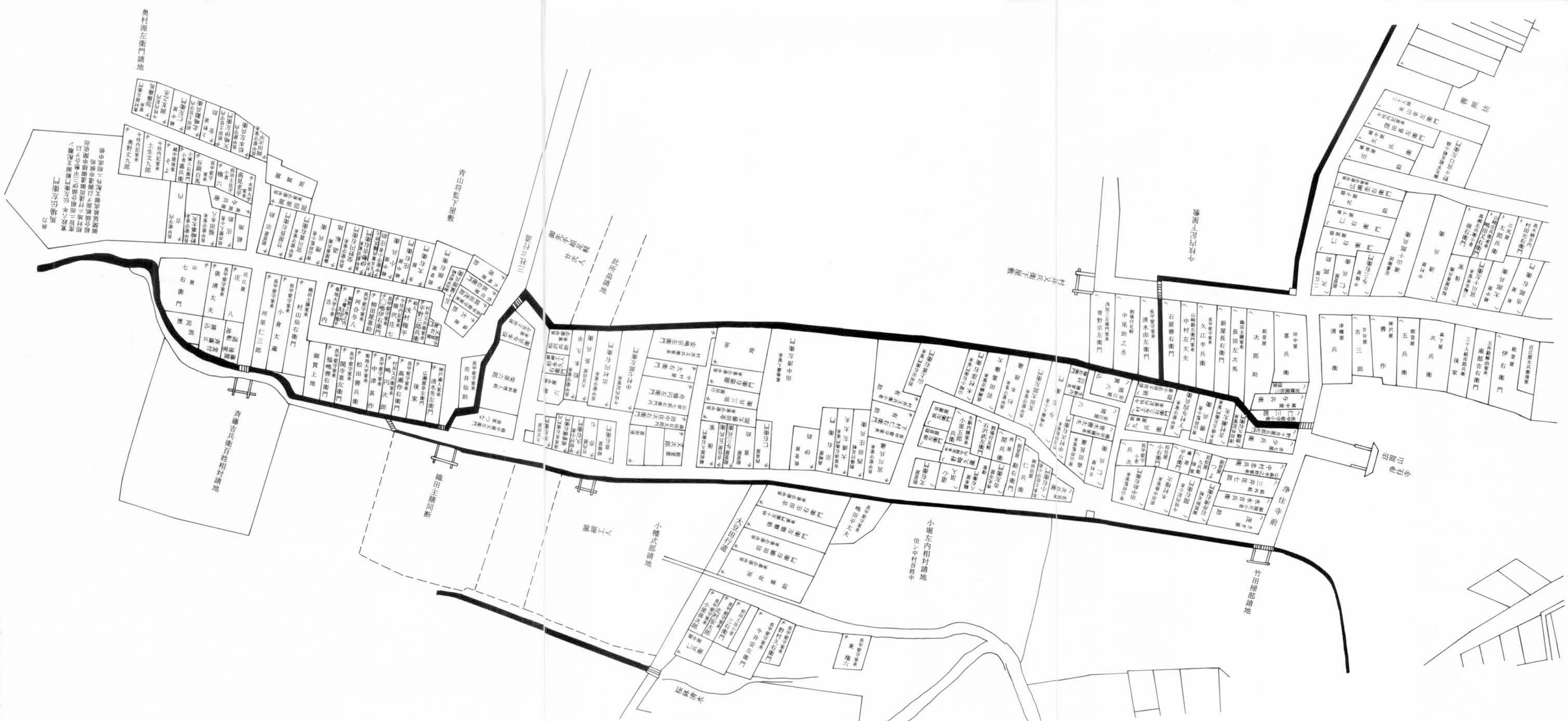


Fig. 33 「金沢町絵図」 蘭田町周辺(文化8年)



昭和22年撮影



Wトレンチ 全景



SX-01 周辺



Pit. 3 遺物出土状況



Pit. 7



Pit. 4



Pit. 3



Pit. 6



Wトレンチ 壁面



Eトレンチ 全景



調査区全景



SK-10 周辺



SK-06・07 周辺



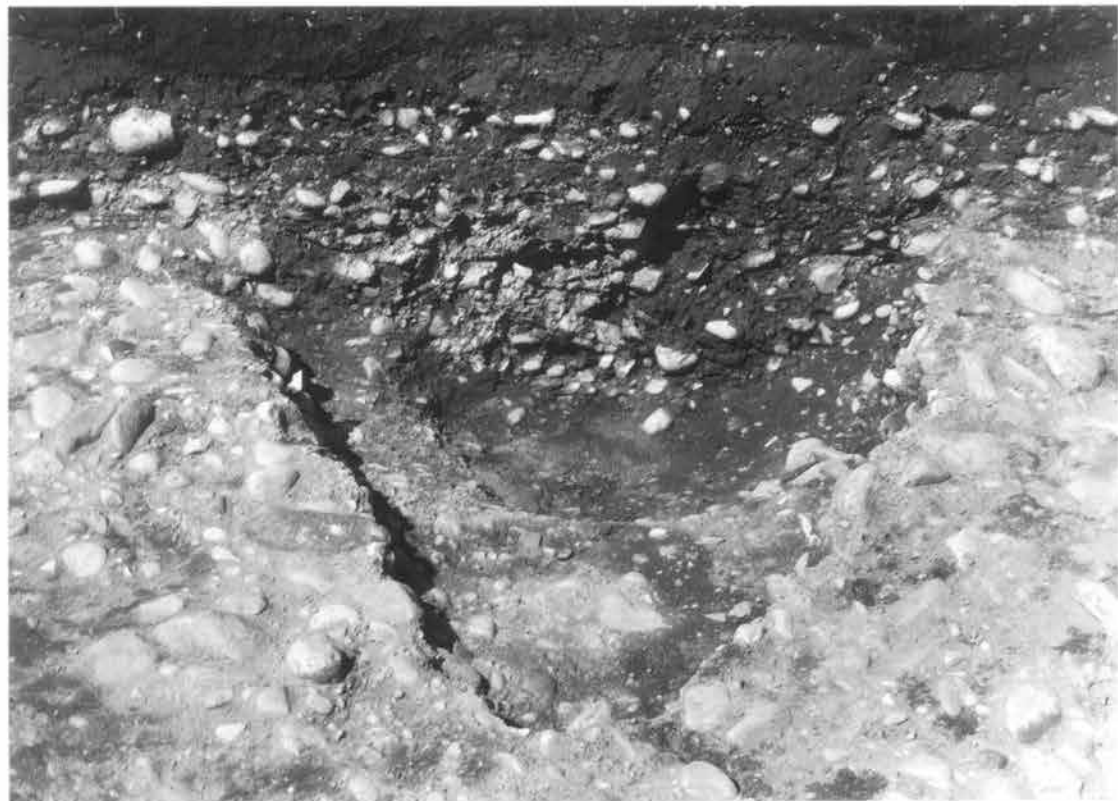
SK-10 全景



SK-10 遺物出土状況(1)



SK-10 遺物出土状況(2)



SK-01 全 景



SK-06 全 景



SK-04



SK-03



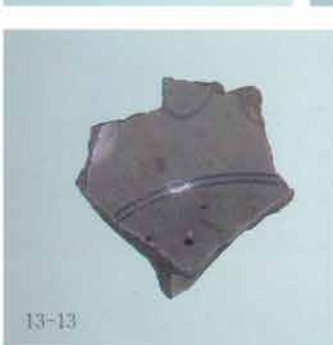
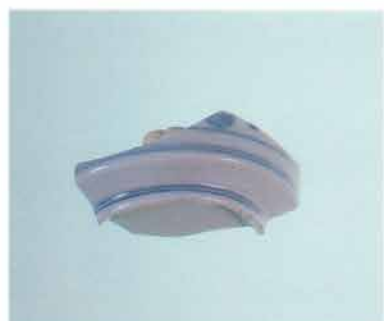
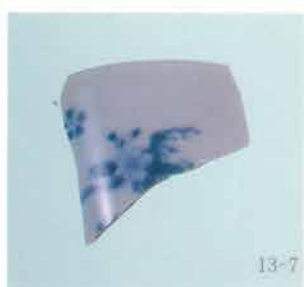
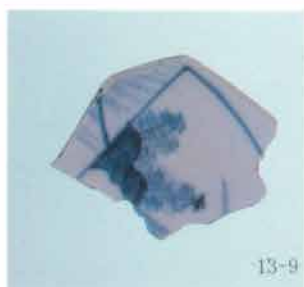
SK-12

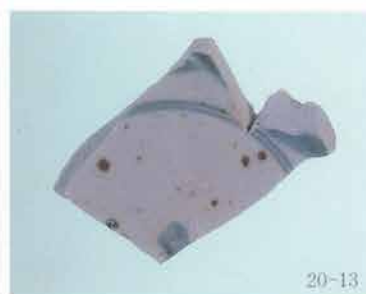


SK-05



調査区壁面







25-2

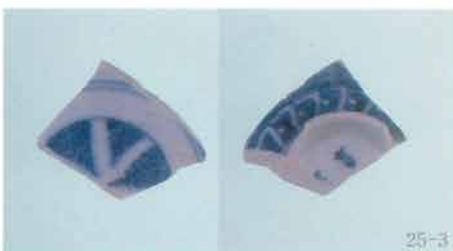
25-1



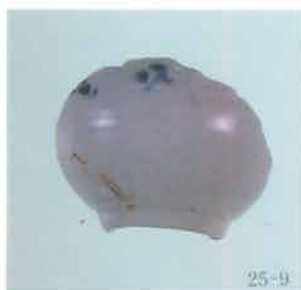
25-4



25-6



25-3



25-9



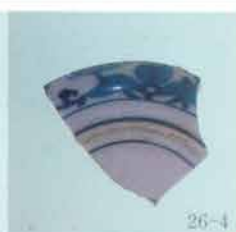
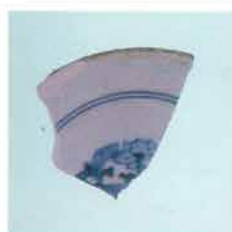
25-18



25-20



25-19



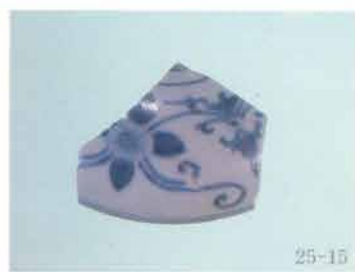
26-4



26-1



25-11



25-15



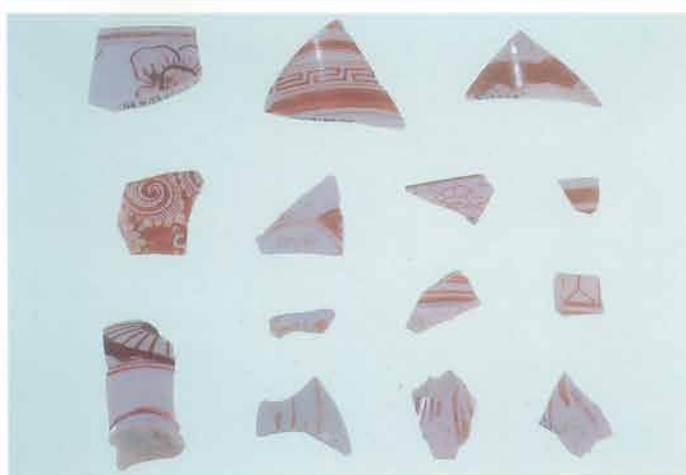
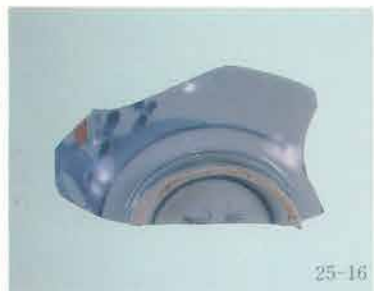
25-17



25-12

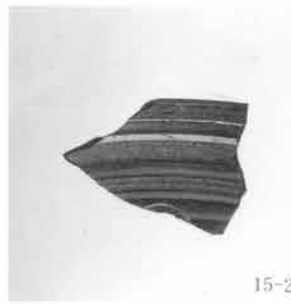


25-14

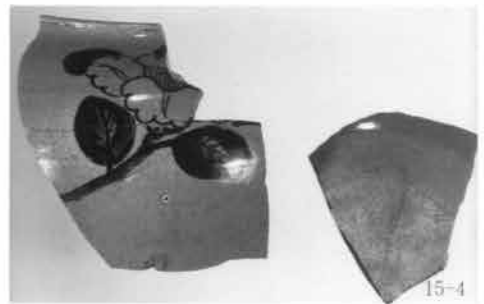




15-3



15-2



15-4



15-5



14-1



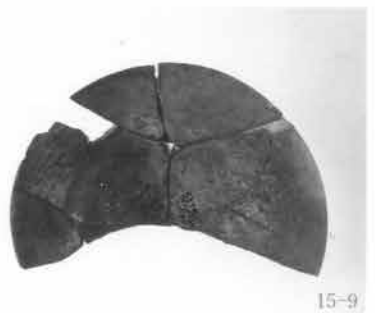
14-2



15-6



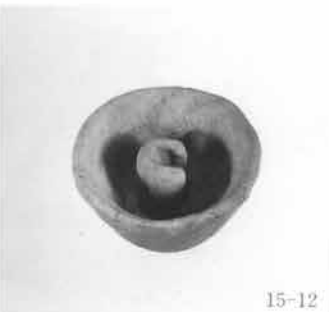
15-7



15-9



15-10



15-12



15-11



15-8



14-3



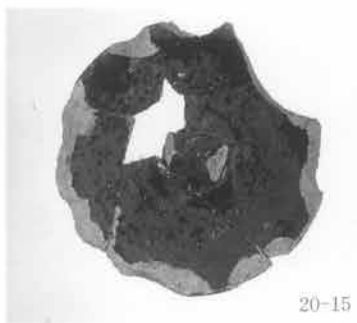
15-13



15-14



20-8



20-15



20-5



23-5



20-10



21-4



21-6



22-1



22-2



22-6



23-3



22-4



22-7



22-8



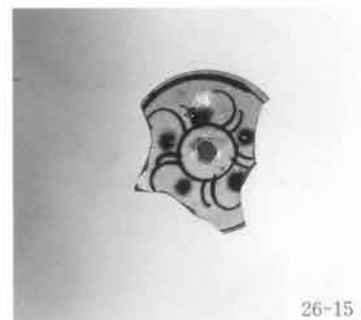
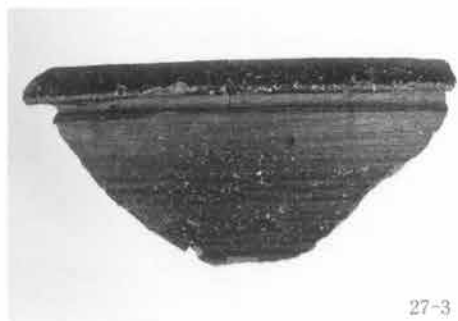
23-6



20-7



22-3





27-11



27-14



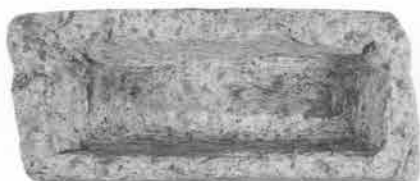
27-15



27-12



27-13



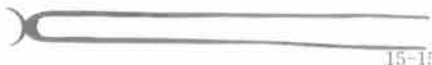
23-7



23-9



23-13



15-15



15-16



23-12



23-11

23-10



23-8



24-5



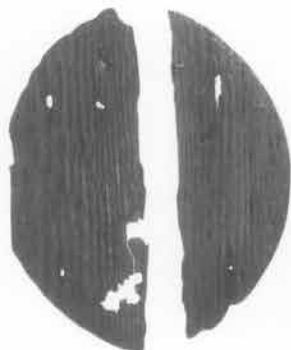
24-3



24-4



24-1



24-6



24-2



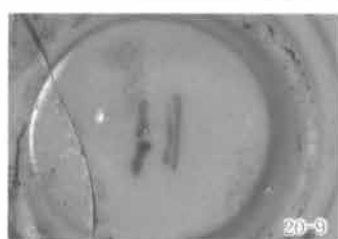
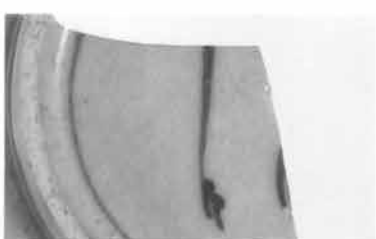
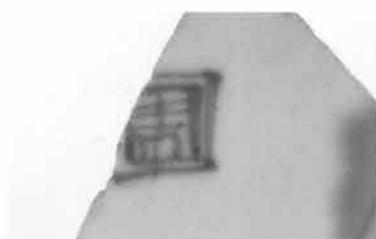
16-1



16-2



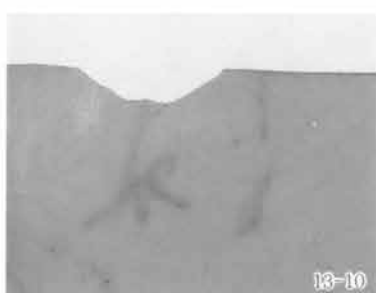
26-2



20-9



13-8



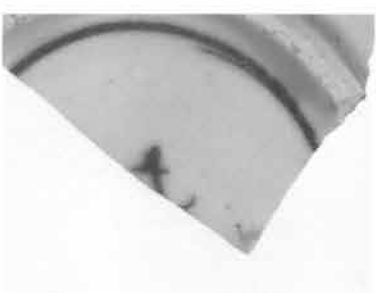
13-10



20-10



24-16



13-4



20-4



25-3



25-18



25-2

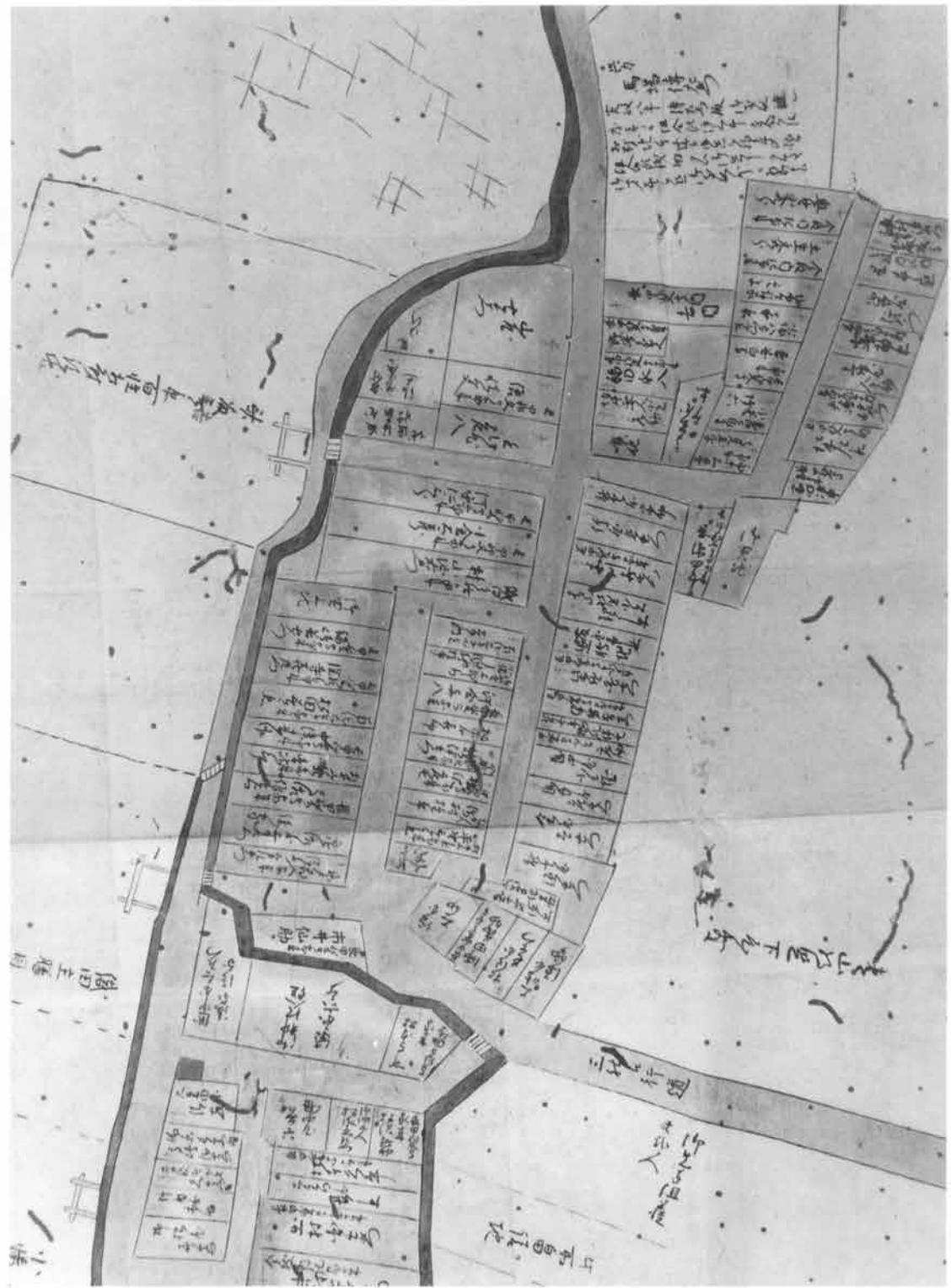


13-11



25-1









元 菊 町 遺 跡

発 行 日 平成2年3月31日 _____

編 集 者 石川県立埋蔵文化財センター
発 行 者 ㊚921 金沢市米泉4-133
☎ (0762) 43-7692

印 刷 所 ヨシダ印刷株式会社
